

「学力低下」の壁を乗り越える

明けましておめでとうございます。今年も、よろしくお願いします。

さて、3学期がスタートし、学校にも子どもたちの元気な声がもどってきました。今回は、昨今ニュースやデータで叫ばれる「学力低下」の壁の乗り越え方についてお伝えします。

授業中、鉛筆が止まってしまったり、ついていくことができずに苦しんでいた、「どうせ無理」と、学ぶ前から諦めてしまっている子もいるでしょう。学力研を牽引する先生方の知恵と汗、そして泥臭い実践のつまった広場になっています。

(加藤)

CONTENTS

◇ 『 学力低下の壁を乗り越える』 ◇

1年間を見通した「学力向上」の取り組み
 実態調査によって学力格差を解消する
 学力低下、教室の後ろ・机間からの気づき
 学力づくりは「学校ぐるみ」を懂れる
 多様化する価値観の中で、いかに学力を保証するか
 学力低下の背景
 学力低下について考えてみました
 成長を感じる学力づくりを温かい学級の中で育みたい
 学力低下改善のための目的意識を持った指導とタイミング
 学力学力低下から学校が求められること

鈴木 基久・・・2
 吉田 雅直・・・4
 川崎 和代・・・6
 図書 啓展・・・8
 古東 秀一・・・12
 橋口 佳世・・・14
 井上 佳和・・・16
 井川有香子・・・19
 福島 尚・・・20
 塩田真奈美・・・22

◇特別寄稿

学力づくりジタバタ物語

山口左知男・・・24

◇連載

「どの子ども伸ばす」を本気で考える連載⑧「意欲格差」に負けない！公立小学校へ
 考える力をつけるための授業の組み立て方②⑨
 社会科（歴史）授業力アップ講座③③
 「先生のための学校」 誌上 開校
 リレー連載③「2Bの鉛筆が教えてくれたこと」より
 局長・常任委員長だより
 学力研カレンダー

岡本 美穂・・・36
 荒井 賢一・・・38
 深沢 英雄・・・40
 久保 齋・・・42
 岸本ひとみ・・・43
 ・・・44
 ・・・45

1年間を見通した「学力向上」の取り組み

鈴木基久

今年度2年生を担任している。4月にひらがな・かたかなの50音表のチェックと多層指導モデルMIMのアセスメントで実態調査をした。前任校の2年生と比べて、今年の学級は書けない子が多いと分析した。だから、あせらずにこつこつと計画的にレベルアップを図っていこうと年度初めに考えた。これまでに取り組んできたことを振り返ってみたい。

①ひらがな・かたかなの

50音表のチェック

これは、2年生でも3年生でも毎学期行っている。書けて当然と思われるひらがな50音表であっても、すらすら書けない子や書けない文字がある子が必ずいる。特に気になったのは、字形が崩れているために、「く」が「し」に、「お」が「よ」に

見えるように書く子がいたことと、それを指摘してもなかなか改められなかったことだ。ひらがなは、何度も出てくるので、正しく書けないと読み手は理解することができない。

かたかな50音表は、4月時点ではクラスの三分の一の子が3分以上かかっている、書けない文字が5つ以上の子もいた。12月では、ほとんどの子が2分以内に書けるようになった。かたかなは、ひらがなに比べて使用頻度が低いので、いつまでも書けるようにならない。網羅的に復習するのが効果的である。

②多層指導モデルMIM

これは、2種類のアセスメントをそれぞれ1分間実施するだけで、その子がすらすら読めているかを調べられる教材である。私は令和元年度

から毎年、年間5回のアセスメントを実施し、実態把握や指導に役立てている。前任校では、1～3年生でアセスメントを実施したので、そのデータと比較して、今の学級の実態を分析することができる。12月に実施したアセスメントの平均点は30点で、前回10月の平均点よりも5点近く伸びていた。4月からは7点伸びていて、前任校の2年生と比較してもなかなかよい結果だと分かった。一人一人の伸びを見ると、得点を大きく伸ばしていた子は、こつこつと取り組む子が多かった。得点が横ばいだった子は、個別にアドバイスし、面談で保護者にも説明した。

③作文

4月に生活科のワークシートを書かせたときに、文章が書けない子が多いと思った。そこで、5月から4行作文、6月から10行作文を週末の宿題にして、文章を書く機会を増やした。1学期の国語では、観察文や見つけたものを知らせる文章を書

く作文の単元があったので、書き方を示して、苦手な子は真似して書くようにした。1度や2度で書けるようになるはずがないので、子どもが経験したことや見たことを材料にして、繰り返し作文に取り組んだ。もちろん、個人差が大きいので、書く子には長い文章を書くようにさせ、苦手な子は作文嫌いにならないように、書けなかったときも無理に書かせることをせずに、何度も書く機会を作る中で身に付くようにした。

2学期の10月からは、200字のはがき新聞を週末の宿題にした。だんだん長い文章が書けるようになってきた。書くことが楽しくなってきた子は、週末の作文の宿題を楽しみにしている。

④家庭学習の工夫

家庭学習の内容も少しずつレベルアップさせている。国語の読解問題と算数のまとめ問題（愛知教育大学名誉教授 志水廣著「どの子もできる10分間プリント」）を組み合わせ

たプリントを週に1〜2回行っている。1学期の読解問題の文章は、短く簡単なものだったが、2学期から徐々に長めの文章にしている。国語の単元テストでは、授業で学習した文章の読み取りしかできない。そのため、文章を読まずに知っていることをもとにして回答する子もいる。読解では、初めて読んだ文章の内容が正しく読み取れるかが重要なので、この宿題は必要だと考えている。翌日の朝学習の時間に、解説しながら〇つけをさせている。

⑤保護者の協力を得るために

私の勤務する自治体では、小学校で学級通信を出すという文化が廃れてしまつて久しい。学年だよりは出していたが、これも勤務校では毎月出さなくても良いことになっている。保護者に学級の様子や担任の思いを理解してもらい、信頼してもらうために情報発信は大切だと思っている。そこで、コロナ禍以降に導入されたメール配信システムを使って、「週末

の家庭学習情報」を毎週配信している。内容は、授業や子どもたちの様子、テストについての情報である。

コロナ禍で懇談会が実施できない時期があったが、懇談会は親同士のつながりをつくる貴重な機会だと思うようになった。今年は、「週末の家庭学習情報」で呼びかけたのが良かったのか、半数の保護者が懇談会に参加してくれた。学習について役立つ情報を学年の保護者に伝えられた。

⑥見えない学力を伸ばすために

基本的な生活習慣は大切なので、4月の参観会で睡眠とスクリーンタイムについて親子で一緒に考える授業を行い、保護者にも好評だった。

学力向上の取り組みは学校教育の本丸だと思う。目の前の子どもの実態を捉えて、少しずつステップアップできるように年間を見通した取り組みを続けたい。また、学習方法を身に付け、自分でこつこつと学習できる子の育成を目指していきたい。

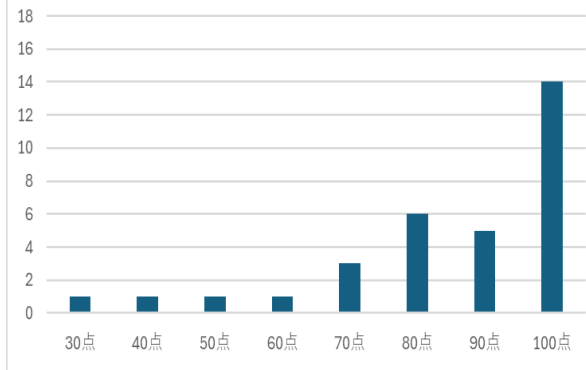
実態調査によって学力格差を解消する

大阪 吉田雅直

今年度は学力研に会ってから初めての三年生担任ということもあり、いつも以上に学力づくりにしつかりと力を入れていこうと決意していました。そこで、始業式の二日後の四月十日に学力実態調査を行うことにしました。これは、学力研が作成した漢字と計算力のテストであり、それぞれ学年別になっているので、三年生なら一年生と二年生の漢字と計算力のテストをすることとで学力の実態がわかるようになっていきます。計算は十問漢字は二十問なので、忙しい四月でも無理なく取り組むことができ、採点もあつという間に終わるので、おすすめです。

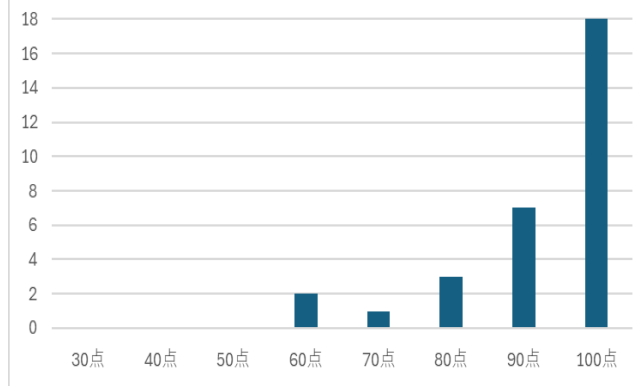
四月の計算力の結果は下のグラフのようになりました。百点の子も十四人いますが、三十点・四十点・五十点・六十点の子がそれぞれひとりずつおり、クラスの子どもた

計算 2年 4月10日



ちの間に大きな格差が存在していることがわかりました。そこで、四・五月は百マスかけ算、六・七月は百マスたし算に取り組み、さかのぼり学習による計算力の底上げをはかりました。その結果、七月に行っ

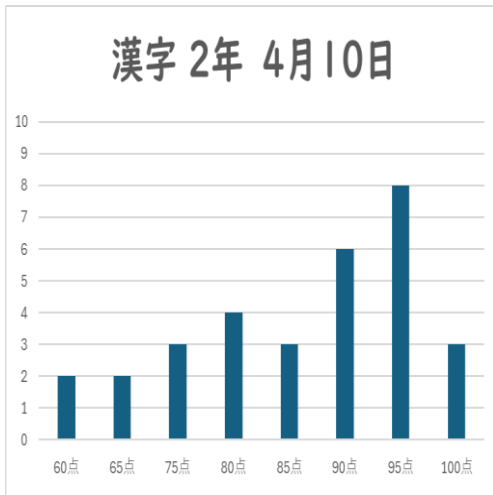
計算2年 7月17日



た二回目の実態調査では六十点未満の子が一人もいなくなり、百点の子が十八人に増えました。特に三年生で初めての「わり算」に取り組む前にかかけ算の格差を解消できたことの意義は大きかったと思います。現在は、たし算・ひき算・かけ算の三種目に連続で取り組む「計算トライアスロン」で、さらに計算力を鍛えています。制限時間の五分以内に三種目をやり切る子がほとんど

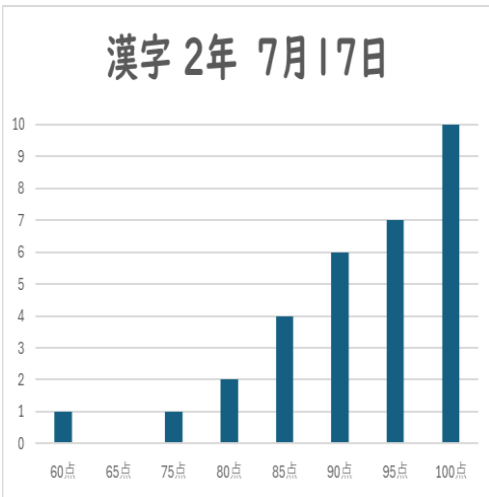
増えていて、格差を解消しつつ、クラス全体としての計算力が確実に高まってきていることを感じています。

四月に行った二年生の漢字の実態調査でも右のグラフのように、六十点から百点まで大きな学力格差が存在していました。そこで、一学期は二年生の「リズム漢字」に取り組むことにしました。まずはみんな



でリズムに合わせて唱えるところからはじめ「読み」をしつかりと定着させたところ

で「書き」のテストに少しずつ挑戦していききました。はじめは答えも配り、答えの丸写しも立派な勉強だと伝えることで漢字が苦手な子も答えを見ながら安心して習熟に取り組むことができるように配慮しました。その結果、七月には百点が三人から十人に加え、ほとんどの子が八十点以上になりました。二年生の漢字の習熟度は三年生の漢字の習得にも大きく影響すると思われるので、引き続き取り組んでいきます。



三年生の漢字については、一点一画を言

語化する「つぶやき書き」による指導を徹底しています。漢字の書き方を言語化することによって、記憶に残りやすくなるだけでなく、おとなりさんと確認し合ったり、テスト勉強を共同でできたりするので、漢字を覚えるという孤独な作業が、友だちとの豊かな交流の時間になり「みんなでかしくくなる」という教室文化のベースにもなっています。

このように、年度初めに漢字と計算力の実態調査を行い、対策を立て、一定期間取り組みを続け、再び実態調査を行うことで、クラス全体の学力を引き上げつつ、学力格差を解消に向かわせることができるのです。四月当初の学力格差のまま授業を進めていたら、低位の子どもたちが自信をなくし、学習意欲を失っていたであろうことを考えると、実態調査と「さかのぼり指導」の大切を実感させられます。三学期は、三年生の漢字と計算の習熟に取り組むことで、学力格差を解消しどの子も同じスタートラインに立って、自信を持って四年生の学習を始められるようにしていきます。

学力低下、教室の後ろ・机間からの気づき

川崎 和代

私は、最近の数年、非常勤講師として小学校に勤務しています。主に算数の時間のT2として、児童の支援をしています。

授業の打ち合わせ時間などは一切ないので、担任の指導の意図や計画、児童の情報や背景もわかりません。その場の空気を読んで、授業の進行の妨げにならないよう、困っている子のプライドを傷つけないように支援することを第一にやっています。参観者のように教室の後ろに立ち、個々の活動が始まると、狭い机間を移動する立場から、学力低下について感じていることを書きたいと思います。

まず、**学習規律が緩くなっているのでは？**と思っています。

「タブレットをしまいましょう。」と指示が出てもなかなかタブレットを閉じようとせず意味不明の画面を出している子がいます。保存や提出に手間取っている場合もあるか

もしれませんが、なかなかしまわない。

授業中に、トイレに行く。鉛筆を削るために席を立つ。お茶を飲む。自分が現役のときは、トイレ、お茶、鉛筆を削ることは休憩時間に済ませておくことでした。時代の流れでしょうか？給水の大切さはわかるけど、真夏の体育ではないのだから、授業中に飲むことではないと思います。

学力が身についている子は、指示を出されたときの行動、切り替えが早いし、授業に向かう準備・構えができています。学力が身につかない子は、切り替えが遅い、学習に向かう構えができていない。学習環境を整えるためには、時代やクラスに見合う学習規律を整えて行く必要を感じています。

個別指導をして気がついたこともいくつかあります。

①学力が身についていない子は、自分がしていることと、今やるべきことにずれが

あります。課題を自力で解決する時間なのに、まだ板書の「めあて」や課題の問題文を写している。課題解決の時間も考える間もなくひたすら板書。友達の発表も教師の説明中も板書。書くスピードが追いつかない。授業時間のほとんどを板書に費やし、内容の理解はできていない。ある程度のスピードで書ける、聞きながら書けると言うスキルが必要かと思っています。

②言葉を知らなすぎる。私の想像以上でした。算数の用語、生活言語どちらもです。4年生の例をあげると、対角線がわからない。向かい合った頂点の「向かい合う」がわからない。「向かい」と「となり」の位置関係を理解していなかったようです。

文章題によく出てくる代金、おつり、1ダース、半ダース。算数の基本的な用語、整数、分母、分子、垂直、平行、たて、横、高さ。これくらい誰でも知っていると思っていたことを知らなかったり曖昧だったりします。

③既習の内容が定着していない。今学習している単元の内容は、理解できているのに既習の内容が定着していないため、問題

を解けないことがよくあります。基礎計算とくに九九を覚えていない子が増えました。少し前なら4年生で九九を覚えていない子は肩身が狭かったはず。今は堂々と「シヒチ24やった？」と普通に聞いている(笑) いやいや笑い事ではない。

まだまだありますがキリがないのでこれくらいにしておきます。

授業の内容も大きく変わりました。音読、基礎計算の時間がほとんどないです。練習問題を解く時間が極端に少ないです。学習した内容を自力で解けるか試す、アウトプットの時間がないのです。

まとめのとき、教科書の記述に基づいて板書するのはいいのですが、その内容をかみ砕いて、子どもの生活や経験の具体例として落とし込んでほしいと思います。抽象的な概念を、具体的な事例や場面に結びつけてあげれば「あつ、そういうことか!」と腑に落ちるのではないでしょう。

抽象と具体の間の行き来を繰り返し、理解が深まってくれと思います。デジタル教科書での操作や動画でなく、実際の体験や作

業を通す、具体例を挙げる活動が小学校の発達段階では、もっと必要と思います。対象な図形では、実際に紙を折り重ねる、回転させて重ねるなどの活動です。折り紙遊びの先行体験が豊かな子は、図や動画でも理解しやすいかもしれませんが、時代とともに見えない学力の先行体験が乏しくなっている昨今だからこそ、学校の教育活動で補う必要があると思います。

先日の「冬のフォーラム」で、深澤先生のお話を聞き、常任のみなさんの報告を聞いてたくさんの学びがありました。

教育に関しての新しい学び方の名称が流行のように次々と出てくるけれど、以前から実践されていることであつたり、子どもの発達段階を無視したものであつたりします。それらの耳障りのよい言葉に振り回されず、目の前の子ども達の実態から出発しなければならぬと思います。新しい取り組みや全体での研究体制で、教師の裁量権が少なくなっていることは事実です。でも、本音を語り合える仲間で、自分の信じる実践を少しずつでも広げていくことはできま

す。そのクラスの子どもの学力が付き、子どもも先生も生き生きしてきたら、周りも変わっていくのではという希望を持ちます。

子どもを取り巻く環境も変わりました。物心ついたら、スマホやタブレットが必需品になっている。オンラインゲームはするけれど、全身を使った遊び、手先を使う遊び、想像力を働かせたりコミュニケーションをとる遊びをする機会が少ない。子どもの実態で、代金やおつりがわからないという例を挙げましたが、買い物の経験もなく現金を扱うことも少なくなったことも影響しているでしょう。家庭生活の先行体験で見えない学力をつける機会がぐんと減りました。学校では音読・計算の実践も重視されなくなり、前頭葉を鍛える貴重な時間がなくなりました。

家庭でも学校でも脳を鍛える機会・活動が減っています。脳が健全に発達することが保障されていない状態だと思います。学力低下の問題だけでなく「心身ともに健康な国民」の育成ができるのか危惧しています。

学力づくりは、「学校ぐるみ」を懂れる

図書 啓展（ずしょ ひろのぶ） 大阪みなみ学力研

計算力の実態調査から出発

新型コロナウイルスの感染が急速に広がる中、2020年の3月に始まった全国一斉休校。

その年4月に中学年算数少人数担当として現任校に赴任し、分散登校を経て全員授業が再開されたのが6月。私は学年団の先生方と相談の上、担当する3・4年生の子どもたちを対象に、計算力実態調査を実施しました。3年生は1・2年生の問題、4年生は1・3年生の問題各10問ずつです。

その結果に驚きました。一例をあげます。4年生は、誤答率が9.3%（1年問題）が約17%、107-88（筆算・2年問題）が約20%、41-11（筆算・3年問題）が約37%と、ひき算の定着度が低く、かけ算九九の習得が不十分な児童もあり、さらに一昨年度末からの一斉休校の影響もあって、754×87（筆算・3年問題）の誤答率も約30%でした。また、

91-6（3年問題）も約30%の児童に誤答が見られたのです。「算数、死ぬ」という子もいるからです。

3年生もよく似た傾向が見られ、107-188（筆算・2年問題）に至っては誤答率が実に約52%にのぼりました。

計算力は算数科の基礎的な技能であり、問題解決への土台となる力です。その計算の理解不足や習熟不足は大きな課題です。

この実態を踏まえながら、算数科のカリキュラム作り、授業づくりを進めました。

その中で困り、悩んだことは、

- ・学習の道具が本当になかなか揃わない。
- ・授業では問題がなんとか自力で解けても翌日はすっかり忘れている子が多い。
- ・遅刻や欠席する児童が毎日10%を超える。学習の積み重ねができていない。

ということです。周りの先生方の意見も同じ

で、本校の特徴だとも言われています。背景には地域や家庭状況もあるようですが、やはり学校として取り組めること一つ一つに力を入れることから始めました。

つまずきを防ぐ「さかのぼり学習」

（1）計算力・漢字書字力調査で

実態をつかむ

冒頭紹介したように、まずは計算力調査で、子どもの実態をつかみます。2021年度からは4月に2年～6年生で実施できました。その結果をもとに個々のつまずきや全体のつまずき・習得度を教員で共有しました。漢字書字力の調査も2021年度からしています。前学年の漢字正解率が50点以下の児童の割合が、4年生が50%、5年生が56%、6年生が60%と過半数に及びます。

このような実態は、学校として「基礎基本の取り組み」が必要であることを教えてくれています。学力（の基礎）実態を明らかにして、子どもたちに「基礎基本の力」をつけて行こう、と共通理解を図って、学校あげての取り組みがスタートしました。

（2）「さかのぼり学習」は

基礎計算の習熟と漢字の読み先行から

既習学年にさかのぼって復習し、基礎を習得させる取り組みを「さかのぼり学習」と呼んでいます。熱気が生まれるように「計算チャレンジ月間」を設定し、学校ぐるみで実態改善に取り組みました。かけ算九九のあいまいな子が多いので、「かけ算お助けシート」を持たせて、子によっては家庭用と学校用「九」を九覚えを担任の先生と協力しつつ進めました。同時に、シートがあると授業でも見ながら自力で問題ができます。九九カードも購入して活用しました。

クラスや学年全体でも、九九プリント、たし算プリント(5やなど一位数のもの)やひき算プリント(11やなど一位数を引くもの)、わり算プリント(2やなど)を活用して「さかのぼり学習」を進めました。全体にこのような取り組みをしつつ、その熱気の中で定着しにくい子に個別指導をしていくという方法はかなり有効です。ただ、子どもたちがとても集中して取り組む「百マス計算」には、部分的にしか取り組みません。クラス担任としての裁量が必要です。

漢字のさかのぼり学習は、春から「リズム漢字」や「読み上げ漢字」(鈴木基久氏作成

を活用(一部改訂)して、前学年の漢字や新出漢字がまずは読めることからスタートしています。「子どもが喜んで音読している」と好評です。「まず漢字を読める」ということは特に苦手な子にとってもハードルが低く、学力の基礎充実のための第一歩です。

「漢字チャレンジ月間」(6月)では、このほか掲示板に「漢字クイズ」を貼って興味関心を促しました。朝、楽しんでいる子どもたちの姿が微笑ましいです。11月のチャレンジ月間では「漢字一字プリント」を活用しての取り組みが好評です。実態調査(2回目)もします。

年度末は2・3月を「漢字計算チャレンジ月間」として設定し、計算は「〇年検定」(計算つまずき克服プリント)所収「一部改訂」を全校で取り組んでいます。実態調査(3回目)で伸びも見て、課題と対策を共有します。

(3) つまずきを予防する

つまずきの二重構造

計算のつまずきには二重構造があると言われます。例えば、 $784 \div 28$ のような2位数で割るわり算(四則計算の総決算)では、第一に、たてる・かける・ひく・おろす、とい

うアルゴリズムや仮商修正をすることの理解が必要で、不十分だとつまずきます。

第二に、手順通り十の位に2が「立つ」と分かっても、「 $12 \times 8 = 16$ 」「 $12 \times 2 = 4$ 」というかけ算、「 $11 \div 5$ 」というたし算や「 $80 \div 8 = 10$ 」などのひき算がすらすらでなければ、わり算の正解になかなかたどりつけません。

仮商修正がスムーズにできないと途中で計算が嫌になります。教科書は、既習事項は習得しているという前提で書かれていますから、実際はこの基礎計算が習熟していないためにわり算も途中であきらめてしまう子がいることを見ておく必要があります。「わり算」の学習に入ってからつまずきがわかり、あわてるのではなく、学年初めから基礎計算の習熟を図り、つまずきを予防していくことがまずは大切です。

(3) 基礎計算の習熟もプリントで

5や 121や 4×7 86÷8 など基礎計算の習熟を毎年4月5月の重点課題の柱にしています。以前の学年にさかのぼって習熟をはかる「さかのぼり学習」です。これはあくまでプリントと鉛筆で取り組みます。手書き学習が記憶を頭の中に刻み込みます。デ

ジタルドリルなどは一切使いません。「さかのぼり学習」の効果については2020年度の3年生での私の実践報告が職場の共感を呼びました。基礎計算の習熟や前学年までの計算の習得をめざす「さかのぼり学習」の効果で、「小数」のテスト(市販)でも平均95点オーバーでした。遅れがちな子も100点、95点、90点がとれるので学習意欲がますます高まり、それ以後の学校としての取り組みの牽引車となったのです。

4月の「計算チャレンジ月間」では2〜4年で繰り上がりのあるたし算・繰り下がりのあるひき算・かけ算九九・基本わり算の習熟に取り組みました。9月の「計算チャレンジ月間」では「基本わり算C型」(611ト)など余りを出すときに繰り下がりのあるわり算)や既習計算の習熟を4・5年生で取り組み、子どもたちは自信をつけてきました。クラス間の温度差はまだありますが、今年度が学校あげでの取り組みを始めて5年目です。計算力の積み上げの効果は、年3回(4月・11月・3月)の実態調査での伸びや4年生の「二位数で割るわり算」の習得度の向上で、はつきりとわかります。

(4) 全体指導と個別指導

これらの取り組みは、基礎計算の「全体指導」です。取り組みの全体像は、「全体指導とともに個別指導もする」ということです。基礎計算の全体指導をしていれば、つまずいている子も見つけられその子にあった個別指導をしやすいります。ある子は、かけ算九九の4や7、8の段が未定着なのがわかり、九九シートを活用しながらの個別指導でやる気に火がついて九九をマスターし、百マスかけ算のタイムが一気に縮まりました。

「学力の基礎の充実」の取り組み

計算や漢字の習熟とともに、「読み書き計算」全体が学力の基礎であり学力の土台を築くと考え、学校ぐるみ(全12学級)で以下の取り組みをスタートして5年近くが経過しました。

●基礎・基本の取り組み

課題…どの子にも読み書き計算(学力の基礎)の力をしっかり学校でつけること

効果…自信、集中力がつき学習に構えができ、考える時間が増え自己肯定感も育つ

①実態調査(4・10・3月)…計算力と漢字書字力↓つまずきや課題を把握し指導に生

かす 伸びをみる

②集中的な取り組み…重点を決め学校ぐるみで取り組む 熱気が生まれる

「チャレンジ月間」を設定する

火・金の朝学を軸に、できれば毎日どこで短時間集中的に

③やさしいことを・みんなで・こつこつと

・短時間集中で・心地よく(学力回復五原則)

みんなが同じ問題をすることを基本とし、

励まし合う学級づくりにつなげる(「読解の基礎」除く)

早くできた子への配慮も

④基礎計算習熟のための10原則(略)

⑤初見でもあまりつかえず音読できる力を

育てたい(音読)

⑥いつもよみかけの本を持たせるようにしたい(読書)

⑦基礎計算の習熟↓前学年までの計算の習得

↓当該学年の計算の習得(計算)

⑧カタカナがすらすら書ける↓前学年の漢字の読み書き↓前々学年の漢字の読み書き↓

当該学年の漢字の読み書き(漢字)

このような視点で取り組んできています。

(年間)ランなど具体的な内容は今回割愛)

(2) 課題と新たな取り組み

↳放課後学習で個別支援

課題は基礎基本に取り組み時間をどう設定するかということです。当初火曜・金曜の朝の時間を軸にスタートしました。遅刻や欠席する子(本当に多い)たちこそ基礎基本の学習を必要としていることを踏まえ、各クラスで時間設定を工夫しています。

また担任の先生の負担をできるだけ軽減できるように課題の調整や印刷は、全部担任外のもので担当するなどの工夫をしています。

実態調査の算数の採点も3年生以上は算数少人数担当の仕事です。3・4年生では担任と私や特別支援の先生がチームになって進めました。2021年度は4年生のあるクラスではコロナ禍で9月にずっと休んでいた子たちが「二位数で割るわり算」が習得できていませんでした。その子たちやわり算に自信のない子を集めて私の教室で「11一位数」から改めて学習しました。すると、やる気を出して取り組みました。「算数が好き」という声も聞こえます。

2022年度は、9月から放課後学習を始

めました。4年生を中心に、放課後算数の宿題が自力でできにくい子などを支援する取り組みです。ほぼ毎日、20分ほど私と放課後学習担当の先生とで支援にあたりました。

担任の先生方は今、本当に多忙にあり、担任外のものが個別に子どもを支援するシステムが求められます。この取り組みで2位数のわり算をはじめ基礎学力の定着率が高まってきました。(23・24年度は残念ながらスタッフの関係で取り組めず。25年度再開)この4年半で職場のメンバーの入れ替わりもあり、学力の基礎づくりへの取り組みの温度差が出てきています。また、これまでの取り組みをどう継承・改善していくのかも課題です。

つながり合う学力づくりを

今こそ大きなうねりに

どの子も本来、勉強ができるようになったい、わかるようになりたいと強く願っています。遅れがちな子どもの中には、中学年ですでに「勉強をあきらめている」子もいます。しかし、適切な援助があれば、自信を取り戻しよりできるようになりたいと、主体的に学習し始めます。ある子は算数が苦手でしたが、テストで100点を取って以来、自信を持ち学習

意欲が高まって学習に積極的になりました。子どもは自ら伸びようとする力を持っているのです。そこに依拠しましょう。子どもたちの学力実態を明らかにし、課題を共有し、できることから学年として、ひいては学校として取り組んでいく。

学力づくりは学力の基礎づくりは教職員の誰もが大事だと考えているので、学校ぐるみの取り組みにするのは夢じゃありません。学力づくりは学校ぐるみの取り組みになることを懂れているのです。

ただ、今は、上から「ICTこそ大事」「毎日ICTを」の圧力がかかり、学力づくりが後方に追いやられがちです。しかしICT教育の先進国が軒並み学力低下に直面し、結局アナログ教育に回帰しているのが世界の流れです。日本でも昨年夏に学力低下の顕在化が報道されました。ピンチはチャンスです。

今こそ、学力づくりを通じて子どもたち同士がつながり合うことを実践の大きな柱に、そしてうねりにしていきたいと思います。

多様化する価値観の中で、いかに学力を保証するか

広島 古東 秀一

① 問題意識：変容する教育環境と「学力」への姿勢

2025年7月に実施された「全国学力・学習状況調査」では、小中学生の平均正答率が低下傾向にあることが示された。特に記述式問題の正答率の低さは、文部科学省も「基本概念の定着の課題として重く受け止めている」と発信している。

この背景には、多くのネット記事でも指摘されるように、学習に対する保護者の価値観の多様化や、家庭での学習環境の変化がある。私は、こうした教育に対する「価値観の多様化」が、児童自身の学習に対する姿勢、さらには教師側の指導観にも大きな影響を与えていると考えている。

実際、本校の6年生においても、テストの結果を「答えを書くこと」のみで捉え、思考の過程を振り返ることに面倒くさいと考える児童が多く見られる。また、即時的

な正解を求め、納得できない学習には拒否感を示す姿も少なくない。

現場では、学習を拒否する児童への苦肉の策として「パス券(課題を免除する権利)」を配布する例も散見される。

こうした現状は、多様化する価値観への対応という側面がある一方で、本来学校が保証すべき「基礎学力の形成」という役割を揺るがしかねない危機的状況であると言える。

いかなる学力観の変遷があろうとも、人間生活の基盤である「読み・書き・計算」は不可欠である。この基礎基本を、多様な価値観を持つ児童・保護者にいかに「納得感」を持って受け入れさせるかが、現代の教師に課せられた急務である。

② 脳科学的知見に基づいた「納得感」のある指導の実践

教育価値観が多様化する中で、従来の「教師の権威」や「義務感」だけでは、児童の主体的な学習意欲を引き出すことが困難になっている。そこで私は、児童が学習の意義を自分事として捉え、納得感を持って活動に取り組めるよう、昨年度、学力研の夏のフォーラムで、東北大の榊先生の講演内容をもとにして、脳科学的な知見を基盤とした指導を実践している。

まず、東北大学・榊教授の知見を引用し「ゲームをしている時の脳」と「音読や計算をしている時の脳」の活動部位の違いを可視化した資料を児童に提示した。児童にとって身近なゲームが、実は脳の「運動野」を主に使用し、思考や感情の制御を司る「前頭前野」をほとんど使っていないという事実は、大きな驚きをもって児童らは受け止めた。

ここで、前頭前野が「コミュニケーション」「我慢する心」「集中力」「記憶力」といった、人間が社会生活を送る上で不可欠な「生きる力」の源泉であることを説明した。その上で、この脳の筋肉とも言える部位を鍛える最も有効な手段が、小学校で伝統的

に行われてきた「音読」や「まず計算」であることを伝えた。

学級では「前頭前野を鍛えよう」を合言葉にして、音読や計算に取り組ませた。これにより、単なる「宿題」や「作業」だった音読・計算が、自分の脳をアップグレードするための「トレーニング」へと、児童の中での意味付けが変化した。

また、ノート指導においても、同様の取り組みを行っている。ノートをとることや、自分の考えを言語化することに抵抗を感じる児童は少なくない。これに対し、私は「書く」という行為の意義を児童らに再定義した。

「ノートをきれいに書くこと」を目的とするのではなく、「手を動かし、言葉を選ぶ過程そのものが前頭前野に刺激を与え、思考を明確にする訓練である」と繰り返し伝えた。

例えば、算数の振り返りににおいて、単に「わかった」と書くのではなく、「なぜその式になるのか」という根拠を書くことが、脳の回路を太くすることに繋がるということである。

この指導を通して、記述が苦手な児童からも「自分の脳を動かすために、一文だけでも根拠を書いてみよう」という前向きな姿勢が見られるようになってきている。それは、ノートを書くことが目的になっているのではなく、ノートを書くことで脳を鍛えたいということに目的が変化したためであると考える。

他にも、「自問掃除」という、自ら考え、自らを問い続けながら掃除を行う活動にも取り組んでいる。これも「掃除の時に、決まりだから静かにする」のではなく、「自ら考え、掃除をしていれば自然と無言になる」という認識をもたせ、自分で考える習慣をつけるという意味で、前頭前野を刺激する非常に大切な活動であると考えている。

こうした取り組みを継続することで、児童らの中に「音読やマス計算、あるいは掃除といった日々の当たり前の活動が、自分の人間性を鍛えることにつながるのだ」という共通認識が育つ。

従来は、児童に「やりなさい」という教師の権威をもとに語って指導をしていたことが多かったと感じている。しかし、現在

のような多様化した社会では、教師が一方的に押し付けるのではなく、脳科学のような客観的な知見をもとに、論理的かつ科学的な納得感を与える指導が、これまで以上に大きな効果を発揮すると確信している。

③まとめ

以上のように本実践では、学力低下という課題に対し、脳科学の知見を用いることで児童の「納得感」を引き出す指導を試みてきた。

今回の実践を通して、指導の「根拠」を科学的に示す重要性を強く感じた。「読み・書き・計算」が、前頭前野を鍛え、豊かに生きるための土台を作るという「一生モノの価値」であることを伝える。この丁寧な語りかけこそが、児童が自らの成長に期待を持ち、前向きに学習に向かう力になるのである。

児童が「自分のために、今この学習が必要なのだ」と納得して取り組める環境を整えることこそが、今の現場に求められる学力保証の第一歩であると考えている。

学力低下の背景

橋口 佳世

昨年までは支援学級で、今年は4年ぶりに2年生の担任をしています。

私が感じている学力低下の背景を三つ挙げます。

一つ目は、教科書の学ぶ量が増え、復習の時間があまりとれないまま、次の単元に進まないといけないことです。しっかり定着しないままになり次に進んでいるのです。

私は今年で教職20年目になりますが、以前は放課後に何人か子どもたちを残して復習する時間がありました。今は一か月に一回放課後支援学習があり、その限られた時間に復習をしています。時間が足りないのが現状です。

二つ目は、教師の仕事量の増加で、教材研究をする時間がなかなかとれないことです。

勤務時間を過ぎても残業されている先生が多くいます。土日にまでもちこすことになります。授業改善時間を保障する校内体

制づくりが重要だと思います。

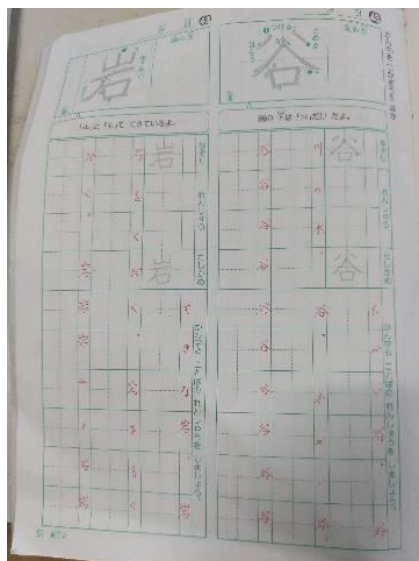
三つ目は文章題の読解力の低下があります。デジタル機器の普及により、アイパッドやYouTubeの動画など見る機会が多くなったと思います。映像で知りたいことが手に入るようになって、じっくり読んで考えるという力が低下しているのではと思います。

● 国語

クラスに算数だけ通級で学習しているAさんがいます。保護者ができるだけ学級で過ごさせたいと願われAさんも必死で国語の授業を受けています。国語もそばについて一対一だと進むのですが、一斉授業だとなかなかついていけません。漢字の書き、音読、読解に限界があるのです。そんなAさんが二学期から行っていることを紹介します。

進出漢字のノートのマスの横に赤い字で

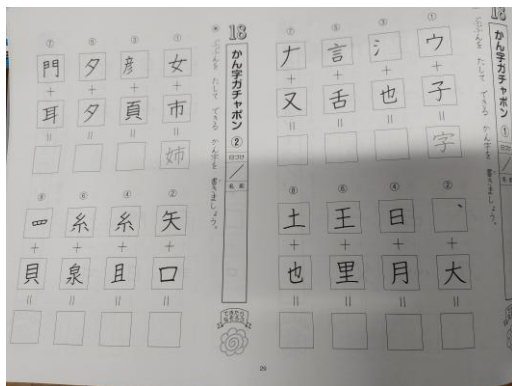
小さく漢字や文章を書くと、黒板を見ながらだとなかなか写すことができなかったのですが、書くことができるようになってきました。



ある日のことです。漢字ガチャポンという、漢字のへんとつくりを組み合わせるプリントを朝の学習の時間に子どもたちに出していました。私が教室に入るやいなやAさんが

「先生、これやったら全部漢字書けたよ。」とうれしそうに見せにきました。いつもの漢字テスト（7問中2問書ける）だと空白が多いのですが、初めて漢字で全部うめる

漢字ガチャポンのプリント



クラスの中でも掛け算はすべて覚えて
いるのですが、文章問題になると、立式で
きない子が何人かいます。授業では、キー
ワードにするしをつけて何が大切か整理し
ています。

さらにすが二こずつづいていきます。

□をこちらで書いて、そこに数字をあて

はめていくようにしています。

$$\begin{array}{r} \square \\ \times \\ 5 \\ \hline \end{array}$$

支援学級でも穴埋めは活用していて、成果がありました。

朝の学習の時間は貴重な時間で、マス計算、漢字の復習、ペアで九九の問題を出し合うなどしています。

日直が前に出て九九表の8の단을

指すと、上から順番の九九をクラスで唱え、そのあと8のだんのさかさ九九を全員で唱えます。また、九九のうたは算数の授業の他に給食や休み時間もみんなで歌つて子どもたちも楽しんで取り組んでいました。

国語の授業が少し早く終わった時は、ビングゲームで楽しみます。16マスに区切られたカードを配り、漢字ドリルの範囲を

指定して、その中から16こ漢字を選んで書き込みます。電子黒板に空白の16マスを映し、一人ずつあてて電子黒板に漢字を書きに来て、ビンゴになったらシールを選びます。習った漢字のとめ・はね・はらいなど気をつけて書くことになり復習にもなります。

私は20代で学力研と出会い、月一回の学力研の地域サークルに参加していました。30代で子育て、家事、仕事で多忙な日々を過ごし、地域サークルの参加もままならない時がありました。40代で、少しずつまた参加するようになりました。他の学校の様子や、大変な学校で頑張っている先生方の話を聞くことができ、自分だけが悩んでいるのではないことに気づかされました。これからも学力研の一人ひとりを大切にしたい。「読み・書き・計算」の力をつけていくことを軸にして、子どもたちと向き合っていきたいと思います。

学力低下について考えてみました

加印いろえんぴつ 井上佳和

学習時間が減っている？

週に40時間以下の学習時間の子どもは、割合を調べた、PISAの2015年のデータでは、日本は5割を超えていました。これは、OECDの平均よりも多いです。つまり、日本の子どもたちの学習時間は、世界と比較すると短いのです。東アジア7か国においては一番少ないです。中国、シンガポール、韓国、台湾と比べると歴然とした差があります。

続いて、2025年度の全国学力状況調査の結果です。

1時間以上の家庭学習

(小学校6年生)

R3 42.9% ↓ R6 37.1%

(中学校3年生)

R3 68.1% ↓ R6 58.9%

たった3年で、小学校で5%・中学校で10%も減っています。特に受験を控えた

中学校3年生の学習時間が大幅に減っています。

PISAの調査委は今から10年前ですので、現在はどこまで下がっているのでしょうか。

恐ろしいデジタル機器

一方、1時間以上のスマホ時間

(小学校6年生)

R3 29.0% ↓ R6 44.7%

(中学校3年生)

R3 67.2% ↓ R6 79.2%

小学校、中学校ともに10%以上の増加です。家庭学習時間が減り、デジタル機器の使用時間が大幅に増えています。

毎年、本校で子ども保護者向けの講演会をしていたら、講師先生から、ショート動画中毒について聞きました。YouTubeのショート動画は180秒までだそうです。

が、一番視聴完了率が良いのは15秒程度だそうです。さらに、初めの3秒以内に興味を引き付ける必要があるそうです。つまり、興味を引き付けても15秒しか持たないのが、今のネット上の常識です。動画中毒より、強烈なショート動画中毒です。

良く知られた話ですが、カナダのマイクロソフト社がカナダ人の集中力持続時間を調べたところ、10秒にも満たなかったそうです。恐ろしいのは、それを改善しようという機運が高まるのではなく、その集中力持続時間内で選ばれるものを提供しようと考えたことです。

日本の2歳児がデジタル機器をつかったり・モニターを見たりする時間は平均2時間です。川島先生や榊先生がデータで示した、1日1時間をすでに超えている状況です。まさに、「デジタルドラッグ」です。タバコの箱には強烈な、注意書きがあります。スマホにも必要ではないですか。

こんな、ドラッグ漬けで集中力が皆無な子どもたちが小学校に入学してきます。じつと机に座ること・話を聞くこと・問題に取り組むこと・友達の話聞くこと・話し

合うこと、ましてや何度も繰り返して知識や技能を身に付ける…できるはずがありません。

小学校という教育機関の実力

教頭となり、小学校とはなんと大掛かりで効率的な社会形成システムであるかと感じました。千差万別な家庭で過ごしてきた1年生が、2年生になるころには、公の中で過ごすための社会性を身につけています。さらに、知識や思考力をつけていきます。

歩き回っていたあの子が、諦めやすかったあの子が、45分座って勉強ができるようになった。すぐに手をだすあの子が、ぐっと我慢ができるようになった。

日本を、地域を支えているのは、まさに義務教育が行われている公立の小中学校です。

教育の場が福祉の場に

学力の定義はさまざまありますが、今の教育界では、「学習体力」「忍耐力」「集中の持続」は軽く見られているのではないでしょう。しかし、学習のベースである子ども

もたちの忍耐力の無さは、現場の先生は（ベテランであるほど）、痛感しているでしょう。勉強がしんどい、宿題が出来ないから学校に行きたくない。みんなに合わせるがしんどい。自分の思うようにできないから学校が嫌だ。そういう子どもたちに対して、大人たちは、「学校に行くことが優先」「宿題をしていなくてもいいよ」「楽しく過ごしていたら大丈夫。」という対応がまかり通るようになりました。

学校の中核は学習です。それを拒否することは、学校システムを否定することになります。学習を優先せず生活の安定を図るようになると、学校は教育機関ではなく福祉機関になります。

福祉とは、人々が幸せに暮らせるよう、社会全体で協力し、生活の安定と充足を目指すこと。

教育とは、人が社会で生きていくために必要な知識・技能・規範などを教え育てる活動を指す。

育てることは、鍛えることも必要です。今いる自分から成長するためには、忍耐力も大きな要素です。

忍耐力は成長のベース

多胡輝さんは著書『我慢ができる子はどう育てる』で、「我慢ができる」社会に参加する資格を得る」と述べています。「子どもの自主性を尊重した結果、その結果の責任は子ども自身が負わなければならない。小さな子は、将来の長い時間にわたって展望する力が足りない。それを補うのが大人の役目である。楽しく我慢する方法を教える。ものを覚えるには、繰り返すしかない。」

プロの教師である我々の仕事は何か。まさしくこれでしょう。学力向上のためには、我慢して目の前の課題に取り組む必要があります。「がんばれ」「ねばれ」「努力だ」「根性だ」という指導は誰でもできます。「言ったのに」という言い訳は良く聞かれますが…。そうではなく、多胡さんが言われるように、楽しませながら、あるいは粘ろうと思えるようにさせながら習熟させていく指導が、プロの仕事です。そのためには一辺倒なやりかたでは無理です。多くの引き出しを持ち、その子その場に合ったやり方を生み出せる。ましてや、デジタルドラッグにどつぷりと使った子どもたちも多く

います。勉強って楽しい！と思わせる教師の腕がまさに必要です。AIにできますか？デジタル教材を使って興味を持たそう！のようなでたらめな意欲ではなく。

学力研

日本の教育技術は、先輩方の研鑽や努力の継承であつたように思います。特に、学力研で学んだときに強く感じました。「どの子も伸ばす」とサークル名に付けた時点で、サークルのスタンスは決まっています。あの手この手を使い、子どもたちを伸ばしていきます。やる気のない子、勉強に興味のない子、落ち着かない子、頑張れない子、彼ら・彼女らを学習のベースに乗せることを実践してきたサークルです。

100マス計算の取組は、全員参加で、記録して伸びを感じさせ、友達とつなぎ、計算力を身に付けさせるところまでがパッケージです。音読も、成長を可視化させ、向上感を与え、友達と一緒にする喜びを感じさせ、自信を持たせ、学習技術として身に付けさせるところまでがパッケージです。私はもう教室で得子どもたちの前に立つ

ことはありません。夏に汗だくで音読するきらきらした子どもたちの姿、シーンとした中で集中して100マス計算をし、終了後伸びを喜びあっている姿。ギラギラした目で学習カルタに必死で取り組んでいる姿。立ちブリッジが全員成功した姿。思い出すたびに、うずうずしてきます。

階段状に成長していくことを理解し、踊り場にいる子どもたちに前を向かせ、寄り添い、クラス全員できらきら輝きながら、粘り強く学習に取り組ませ、学力向上を目指してきました。

知的肺活量の増大

内田樹さんは著書『知性について』でこのように語られています。「映画等で良くある、沈没した船に閉じ込められた主人公が、浸水した部屋から向こう側に潜水しなければ生きのびられない。それも潜った先がどうなっているかも分からない。肺活量がぎりぎりのところで、先へ進むか、戻るかを判断しなければならぬ場面。これは、命をかけて先へ進めという教訓以外に、もう一つの教訓がある。肺活量が大きいとい

うことは単に量的な多寡のことじゃないんです。ふつうの人が遭遇することになる『正解のわからない決断』に向き合わずむ。これは大変なアドバンテージです。ちよつと息をとめて泳いでるうちに『向こう』に抜け出してしまふんですから。

おそらく人類史のある時点で、賢者たちは『知的肺活量を増大させること』が人類の生きる知恵と力を高めるためのきわめて重要な訓練であることに気付いたのだと思います。これは、難問に取り組んでいると、良いことがおきる。それは、難問の正解にたどりつくということではなく、副次的な日々の生活で求められるさまざまな選択について、ほいほいと適切な判断が下せる能力がいつの間にかついているということだそうです。」

子どもたちの課題が、内田さんの言われるほど大きなものではないでしょう。しかし、学力を身に付けるとは、ただ学力だけでなく、生きる上で必要な様々な力がついていくのです。そういった意味で、学力低下がもたらすのは、学力の低下だけではないのです。今、日本、粘りどころです。

成長を感じる学力づくりを温かい学級の中で育みたい

四年担任 井川 有香子

二期期までの子ども達の成長をふり返って今、どんなことをお考えでしょうか。

ICTの導入で、「学力低下」を感じている現場も多いと聞きます。今回は、目の前で感じる「学力低下」の実態とその実態からどう改善しようと努めているかについて愚痴になりそうですが、書きたいと思います。

【子ども達の実態と改善策】

書き

・漢字のつまずきは覚え方にあります。

①漢字の苦手な児童は、筆順で覚えてきた児童が多く、音読み・訓読みをセットで覚えることもなく、ただ漢字として書いているだけという児童が多い。②「最高」という熟語を「最功」と書いていても気づかない。スマホやタブレットが、文字を勝手に変換してしまうので同音異義語の取捨選択ができていない。

③前年度の漢字の小テストで三分の一しか全問正解がないという状況(35人中11人)。漢字を使わせる必要がある。

・文をすらすら書く体力がない。

④漢字ドリルを使って、漢字ノートに漢字だけを書く宿題をこなしてきた弊害で、文章の中で活用できない。⑤タブレットの使用が増え、実際にノートに書くことが減っていることも影響している!!⑥SNS

を見ることも多くなり、読書量が減っているため、想像して書く・説明して書く、などがイメージできにくい。⑦鉛筆の持ち方が正しくなく、疲れやすい持ち方の児童が多い。①～⑦の実態がみられました。

書きの改善策

※つぶやき漢字(画数ではなく、漢字を分解してとらえ、つぶやきながら覚える)

この方法で指導しています。漢字テスト前の問題を『持つべきものはお隣さん』で

出し合って、つぶやき書きで漢字の書き方を確認する活動をしています。

※字源を入れると漢字を楽しく覚えます。

※熟語を使った例文づくりを取り入れています。担任のことを主語にして、例文を作って楽しむことを始める児童がいて、

例文

井川先生が自転車でこけて、指を骨折しました。早く治るといいなと思います。

くという例文を作ってくる子どもの宿題を紹介して、「僕も私も」と意欲を育みました。すると、光村の『漢字の広場』の想像したことも加えてお話を作ろうという単元で、名作が生まれるようになりました。

楽しみながら漢字を使って作文を書き、

クラスみんなで「まねぶは学ぶ」共有して、言語活動に取り組んでいます。

※鉛筆の持ち方指導もしていて、保護者にも頼んでみてもらっています。

計算

・計算の筆算で使う補助数の書き方がバラバラなど、履修項目の習熟。

学級数が多く、統一されていない状況で今まで履修してきた。補助数を書かない児童も多く、ケアレスミスが多い。学力格差

は大きい。学校として、系統立てて、算数が指導できるようにする必要があると思う。

- ・文章問題が苦手の児童が多い。

文章の読み慣れができていない。読書離れが影響か。文章の量で諦める児童も多い。

【計算の改善策】

※読み上げ計算タイム（履修項目の復習）

学力格差を少しでもなくすため、また、次に習う単元のレディネスとして活用。ペアで楽しく取り組み、伸びた記録は、給食時の牛乳乾杯で称え合う。成長を感じる取り組みです。

（志水先生の読み上げ計算WSを使用）

※授業の中の学び合い

班での学び合いの時間を取っています。

その中で、気づきがあり、気づかせてくれた友の姿に憧れて、自分も教えたり伝えたりしたいと思つて、学ぶことに前向きになつていく姿を見できました。個別最適化を学習に取り入れるという流れがありますが、話し合いの中で学びを深める学習活動が子ども達に必要であることが実感できます。

※宿題を科学する

ドリルやタブレットを与える宿題ではなく、ノートを使う、思考力を問う、問題づくりなど、子どもの実態に合わせた工夫したものに組みましています。

【成長を感じる学力づくり】

「学力低下」は、宿題のあり方や授業のやり方（ノートを使う・話し合いを行うなど）、今までやってきたことで、不易なことを大事にすることで防ぐことができると思います。

算数を諦めている子には、さかのぼってどこでつまっているのか、漢字の苦手な子は、字の見え方はどうなのか、どの学年から習熟できていないのか、音読の苦手な子、板書の苦手な子、それぞれの困り感がどこからなのか、何なのかを見つけることも大事です。中には、何が苦手なのか把握するために発達検査をすすめる場合もあります（二生懸命がんばっているのに、効果がない場合）。

空間認知能力、ワーキングメモリーなどその子の特性を知つて対応することができまします。学びを諦めさせないために、困り感の強い子の対応は早めに対応して、伸びを

実感させることを大切にしています。宿題の内容を配慮して、さかのぼり学習を優先したり、九九会を開いたり。わかることを増やすことで、次の学びにつながります。ノート指導や連絡帳指導、音読指導はすぐに効果が出るので、大事にしています。

【子どもと楽しむ】

授業づくり・学級づくり

授業での班活動もペア学習も、学習を諦めさせないために大切です。勉強の苦手な子どもがひらめきの提案をすることもあります。国語の読解でも本質に気づくこともあります。個人ではなく友達と考え、発表することは面白いし、非認知能力も育てます。そのために四月から、全員参加の学び合いができるように土台づくりをしています。朝の会のペアトーク、係活動も掃除の担当も、朝の会で話し合つて決めます。もちろん、前日の反省があればそれも踏まえて行います。学級会も自分たちで回せられるように班長会議から鍛えます。

学級集団づくりの土台があつてこそ、学力低下を防ぐ授業がつけれると私は思っています。三学期もがんばりましょう。

学力低下改善のための目的意識を持った指導とタイミング

福島 尚（神奈川県）

今日、どこの学校現場でも【学力低下】という言葉聞かない日はないぐらいではないでしょうか。ただ、自分が教師になった頃は、そこまで【学力低下】の言葉を耳にすることはなかったように思います。

では、いつぐらいから【学力低下】を実感するようになったか、という話になると必ず『ゆとり教育』が話題になると思います。よく調べると『ゆとり教育』は小学校では1980年から始まっています。そして学習内容が減り、理数の時間も減るなどの第二次ゆとり教育が1992年に行われました。それらのことが学力低下に拍車をかけたといわれています。では、ゆとり教育以前に行われていた詰め込み型の指導を再び行えば、学力が向上するのでしょうか。ゆとり教育の目的は、自ら考える力をつけることでした。そして、ただ勉強に追われるのではなく、ゆとりのある時間の中で

さまざまな経験をして生きる力を身につけてほしいという願いが込められていました。そのような取り組みが進められてきた中、自分がこれまでの二十年間で感じていることは【耐力低下】です。これが【学力低下】につながる大きな要因の一つだと自分は感じています。【耐力】といっても、何事も我慢することではなく、粘り強く取り組む力だと自分は考えます。例えば、【耐力】の課題についていうと、最近多く見られる主な姿は・・・

- ・分からない問題だと、考えることをやめてしまう。
- ・考えずにすぐに答えを聞こうとする。
- ・自分の気持ちがちやんと伝わるまで伝えようとしない。

では、このような姿を目の当たりにして、どのようにしていくかというと、自分は次

のように取り組んでいますが大前提として、とにかく、どの児童も自信をつけ、自分自身が何事も挑戦できるのだと思えるようになることが大事だと考えています。そうではないと、前向きになれなかったり、考えることすらやめてしまったりするように感じます。では、どのように自信をつけていくか、それは一年間の見通しを持つて考えた取り組みを行うことだと思います。その場しのぎや思い付きの取り組みは結局長続きせず、継続しないことが多いように感じます。自分も以前はそうでした。だからこそ、短時間で子どもも苦にならずに、続けていける取り組みがよいと思います。

例えば、算数でしたら初めの5分間に自分はチャレンジタイムを設けています。（各学年で、子どもたちがワクワクするようなネーミングにしています。○○道場や○○アップタイム！など）一年生であれば、基本的な計算問題を5問行ったり、いくつといくつを口頭で行ったり、フラッシュカードなどをします。とにかく、短時間で子どもたちも「え、もう終わり？」と思えるような時間がいいです。その気持ちがあると、

「もつとやりたい!」「明日もやりたい!」
というプラスの気持ちになっていきます。
自分のできた感が得られる活動であると、
自然と力がついたという実感につながります。
この取り組みで気をつけないといけない
ことは、速くできる子をヒーローにする
時間ではないことであり、苦手な子を明らかに
する時間でもないことです。それぞれ
が昨日の自分に挑戦し越えていくことを意
識付けたいものです。上の学年になれば、
前の学年の復習を行うなどのさかのぼりを行
います。特に高学年であれば、今まで蓄
積してきたものがあるので、丁寧に行いなが
ら自信の回復につなげていきたいものです。

また、国語であれば特に書くことが多い
ので、内容を簡単に書いて済ませてしまつ
たり、書くこと自体と向き合おうとするこ
とをやめてしまったりする姿が多く見られ
るように感じます。自分は小学生の頃、国
語が嫌いでしたが書くことは好きでした。
その時のことを思い出すと、クラスのほと
んどの人が書くことが好きだったように感
じます。そして、友達が書いた文章を読む

ことが楽しみでもありました。という経験
もあり、自分は友達が書いた文章と向き合
う時間をしっかりとるようにしています。
一言もしやべらず、じっくり読むことで、
相手の思いや考えなどに触れることができ
自分が感じたことを相手に伝える。シンプ
ルですが、読み手が自分の考えと向き合っ
たと感じるようで、子どもたちからは好評
でした。ただ、初めはすごく短い文にする
ようにしています。いきなり長文だと、差
を感じてしまい結局【長く書ける!!できる
子】のような構図が出来上がってしまうか
らです。

そして、子どもたちの【耐力】が飛躍的
に成長する教科は「特別活動」と「総合的
な学習の時間」だと自分は思っています。
なぜかというと、教科書がないからです。
教科書があると、どうしても最後にはそれ
で確認することができてしまう。でも特別
活動と総合的な学習の時間にはない、答え
合わせができないので、自分たちでどうに
かしないとけない、という意識になるよ
うに気がします。つまり、自分たちが進め
てきた取り組みが最後には胸をはって「こ

れでよかった!」と思える活動にしてい
くということです。特別活動であれば、常に
クラス目標を軸にしながら自分たちのクラ
スを成長させる活動を自分たちの手で運営
できるように積み重ねていきます。自分は、
係活動やクラス会議を中心に組みませて
いきます。一人ひとりが役割を持って、ど
の子が欠けてもクラスは成り立たないこと、
どの子も大切であることを教師が発信して
いきます。

総合的学習では、一年間のテーマをクラ
スで決め、それぞれが課題を持って取り組
んでいく意識付けをしています。その際
に気を付けないといけないことは、教師か
ら常に与えられることは無いということを
宣言することです。(子どものサポートは必
ずしますが、教師が「今日は○○」につい
て考えます、という投げかけはしないとい
うことです。)

現在、様々な課題はありますが子どもを
どう成長させていくか、目的意識を持った
指導をどこで、そしてどのタイミングで仕
掛けていくか、ということが大切なのは
ないでしょうか。

学力低下から学校が求められること

大阪 塩田 真奈美

子どもたちをとりまく環境

近年、子どもたちをとりまく社会の状況は著しく変化しています。テレビからサブスクへの移行、スマホからLINEやSNSの閲覧、教育の現場では、タブレットは文房具の一つとして支給されました。スマホは子どもたちのコミュニケーションのツールとして媒介し、充電しなければ、途絶えてしまう希薄な人間関係にあります。子どもたちのLINE上での語彙の少なさからあいての意図する心情まで汲みとることはむずかしく、それをいいことに対面で話せないことは、LINEで済ませ、簡単に人とのつながりを切ってしまう。子どもたちの中には、強気に「別にいいねん。だって、ゲームで話しをする友だちがおるから」と不登校傾向に陥ることも後を絶ちません。

日常にあるテレビアニメ、音楽、読書など娯楽の楽しみ方も変わってきました。すべての構成は、結論からくるものが多く、音楽においても、いわゆる余韻や余白なくサビが始まったり、読書においても、5秒後に意外な結末という本が出たりするほどです。それらが、子どもたちに流行して受けるのです。なぜなら、知りたい情報（答え）がすぐにわかるように構成されている

からだと思います。子どもたちの日頃の授業のようすや、家庭学習においても、答えを求めるだけの子どもたちが気になります。わからないことを調べたり、考えたりすることよりも、答えをきいて、わかったつもりになってしまふので、自分の間違いと向き合えないのです。間違えていても、「あつてるし。」と言い張る子もいます。子どもたちをとりまく環境の利便性は、学力低下を引き起こす要因と言えるでしょう。その環境を作っているのは、わたしたち人なのです。

就学する子どもたち

コロナ禍以降、子どもたちの学習体力も低下しているように感じます。就学するまでに身につけた力が備わらず、学力の土台になる経験の少なさや偏りがみられます。また、保護者の経済的理由で子育てができにくい環境にいる子どもたちもいます。いずれにしても、岸本裕史氏の「みえない学力」がなかなか身につかないまま就学してくるのです。ですから就学してからの子どもたちは、授業の中で、生活経験や集団づくりを含めながらとりくんでいくことが大せつです。ひらがな学習が始まると、子どもたちは、瞳を輝かせながら書き

ます。字をかくことの憧れは、デジタル化がすすんでも、変わらず子どもたちの心にあるものです。しかしながら、五十音が終わるまでの過程で、かくことのむずかしさに直面するのです。ひらがなの学習をあきらめず、とことん書いて読むことをくりかえします。タブレットが支給されたとしても、渡すタイミングを図る必要性があります。

基礎学力の練習

「字をかくこと」それは、人が生きるために欠かせないことです。日本の識字率は、貧困や人権課題に加え、近年では、字が読めても内容理解がむずかしい機能的非識字や読み書きに困難さをもつ人、タブレットの普及、外国人労働者が増えていることから、高いとは言えなくなってきました。子どもたちは、字を書くよりも、小さな指でスマホやタブレットで文字の入力が、簡単にできるのです。しかしながら脳への刺激や記憶にとどまらないことが明らかになっています。かくことをあきらめず続けていくと、子どもたちは、汗で滲んだての平をみせに來ます。授業後、集まってこぶしに黒鉛がついているてを互いにふれ合い、うれしそうにしているのです。子どもたちは、達成感を感じながら学びを楽しんでいます。

「読むこと」本を読まないのではなく、最

後まで読みきれず、あきらめている子どもたちがクラスに半分いました。つまり物語の世界の楽しみ方を知らないのです。登場人物の気もちの変化を読みとることなんてほど遠いことでした。物語の結末さえわかれば、いいのかも知れませんが。さらに悲しいことに結末からさかのぼって場面ごとに読みとりをすることに飽きてしまう子もいます。音読も活字を読んで、言葉の意味になんの引っかけりもなく、すらすらと読みすすめているのです。言葉の理解はもちろん、物語の展開の面白さを味わえないのです。そのような実態をふまえ、2学期は言葉に立ち止まることを意識してとりくみました。主に3つ挙げられます。

①連れ読み→間違え読みを正して読む

②わからないことをそのままにしない

③ペアやグループでとことん関わる

この3つのことを意識し、何度もくりかえし、一つひとつの言葉に立ち止まる練習をしました。たとえ、ひらがなが書けていても、文節が区切られなかったり、熟語として捉えられなかったりすることがあります。「わからないことはありませんか?」ときかれても、何がわからないのかに気づけていないのです。

初めは、音読の連れ読みを徹底しました。声に自信がついてきたら、わたしが間違え読みをし、子どもたちが正しく読み返す練習

習を毎日しました。つられて読んではいけませんので、自然と子どもたちは、教科書の文字を追うようになりました。いろいろな教科書をもつて姿勢を正しくなど、規律的な小言や、気合いを入れなくてもいいのです。しまいは、間違いをわざわざいわなくても、みんなで声をそろえて読んでいくようになりました。

次に、内容理解をしながら音読できるように、わからない言葉に立ち止まる練習をしました。少しでもわからない言葉にストップをかけるのです。こちらが思っている以上にわからない言葉があるのだと思われない言葉がありました。ストップのかかったわからない言葉をクラス全体にきき、言葉の知識、理解を共有していきました。

さいごは、教師対子どもではなく、子どもたちで音読できるように、ペアやグループを活用し、子どもたちが全員読めるまでとことん関わり合うように指導しました。また、ペアやグループで話し合う活動を取り入れたのであれば、困り感をもっている子どもたちが、できるまで待ちます。自分も友だちも共に支え合いながら、考えることができたなら、うーんと褒めます。この3つをどの授業においても、音読からとりくむと、子どもたちの集団の声に明るさと自信がつき、学習に向かう集中力や、聴く力が持続してきました。しかしながら、ここ

でお伝えしたことは、ほんの一部で、子どもたちの変容や成果はすぐに結果としてあらわれるわけではありません。授業案を考えても、しつくりこないことがほとんどです。現代社会では、すぐに成果や結果を求める風潮がありますが、今年、2人の日本人がノーベル賞を受賞しました。坂口志文氏、北川進氏の言葉が印象深く、わたしたちの心に残っています。「ノーベル賞受賞につながる研究は、恵まれた研究環境のもとで一貫して行われたのではなく、環境が、変わりながらも、辛抱強く努力して研究を重ねてきたからだ。今の社会は、すぐに役立つ出口重視の「成果」を求めている」と言及された。そして二人はそろって、科学の低下を示唆され、基礎科学や基礎研究にこそ支援が必要であることを伝えられた。このことに関して教育の現場に置き換えても同じことが言えるだろう。学力低下問題は、わたしたちがどれだけ、子どもたちに学力の基礎を確かなものにしていくか、なかまと共に、考え続けなければならないと思う。時代の流れにとらわれず、子どもたちのくらしや背景を受けとめながら、それでも揺るぎなく、「学校」という場は、教科書を活用し、教師と子どもたちが豊かに学びあい、保護者や地域と協力しながら、どの子にも学びを保障する礎となっていくことを信じて。

『学力低下』の壁を乗り越える

大阪 根無 信行

『学力低下』が教育現場で喧かれはじめて、どのくらい続いているのでしょうか。もう、10年は経つのではないのでしょうか。その間、総合的な学習の時間、外国語（といっても英語の先取り）、プログラミング、道徳の教科化。数年間で学校の取り組みの目玉が変わり、従来学校として力を入れてきたいわゆる『学力づくり』に時間をかけることよりも、新しい取り組みをどのように学校で運用するか、その導入のための研修をはじめとする、以前の『学力』とは違った方向に力を注ぐことが教師の仕事のようになってきてしまった時期が続きました。

『学力低下』を指摘されることで、学校こそ学力向上に向けて取り組むことが大切として、手立てを打とうと頑張るのですが、次々と新しい教育政策が押し寄せてきて、それが学力低下対策のようにもてはやされたからです。けれども、それに反して学力低下が言われ続けていると言ふことは、年々『低下』は解消することなく、積もってしまっている

ということではないでしょうか。先輩の教師の方々からは、「子どもたちの集中力が続かなくなった」「昔の教科書は字も小さかったし、計算練習の問題数も多かった」「伝えたいことを書くのが苦手な子が多い」と聞きます。一年間の学力低下は少しずつであつても、積年の低下の結果、今に至っているのだと思うと、学校ぐるみでなければ、学力低下の壁は乗り越えにくいのではないのでしょうか。

さらに、近年、学力低下の壁を乗り越えようというよりは、学力の『低下』から目をそらすようなことが多くなつてはいないでしょうか。例えば、『ICT教育』の一部だけを誤用している『ICT学習』。解答確認だけでなく、出題までも教師が関わらずに、子ども個別で進めるアプリのドリルや、隙間時間に与えるだけで、『学力』をつけられているのか、不透明です。そして、紙と鉛筆、教科書を使ったものと比べて、子どもたちの学力の定着や剥離が見えにくくなっています。また、子どもそれぞれのゴールが違う「自由進度学習」も、子ども

がそれぞれ到達したゴールが大きく違つても、「達成」と見なすことで、『低下』は免れたこととなります。私の勤務している市では、学期末の通知表は、「校務支援システム」を用いて、全校共通の表記で行います。システムに入力することで、ほとんどの評価がA・B・Cの3段階の「B」となります。（テストで、すべて94点を取っている児童も、70点の児童も、通知表上は全く同じです）。普段授業を受け持っている担任は、学力の低下を感じていても、入力すればB判定となれば、『低下』から、目をそらすこととなります。通知表は「B」なのに、学力調査の結果は・・・ということもよくあります。教科担任制に任せすぎること、継続して少ない人数の子どもたちを見続けることから遠ざかってしまいます。どちらも多く忙の中、『履修主義』に陥ってしまう教員が増えてしまわないか、懸念しています。

子どもが変わつたからではなく、学校外から求められていることが変わってきたことが、今の子どもたちの学力に影響しているように思えます。そんな中、学校は、どのようにすれば『学力低下』の壁を乗り越えられるのでしょうか。

○ 実態調査を行う

学力低下の実感は、“なんとなく”や“わり算ができない”、“読み取りが苦手”など、様々です。けれども、その根底には、「読み書き計算」といった基礎学力が必ず関わっています。わり算は、九九ができないことや、繰り下がりの引き算でつまづいていても、同じように「苦手」につながります。国語だけでなく、算数の文章題、理科や社会の問いにも、正しく答えるには、資料や問題を「正しく」読み取ることが大切で、そこにも「漢字の力」が必要になってきます。ですから、これから取り組みたい学習に使用するために必要な、独自の「計算力」「漢字力」の実態調査を、学年、できれば学校で行ってから、さかのぼり、くり返して定着を目指します。学力の基礎をきたえることで、教える教師も、子どもたちも、自信を持って当該学年の新しい学習に臨めるようにしたいものです。

○ タブレット学習から紙と鉛筆へ

今年度も、全国学力調査の結果が夏に返ってきました。学力調査を毎年全員がまる一日かけて行うことを全肯定しているわけでは

ありませんが、小学校で学んできた学習を活かして解けてほしい程度の問題である、と思っ
て結果を見ると、学力の低下は感じずにはい
られません。今年度の六年生は、二年生から
タブレットを全員配布された学年です。その
上で学力調査の質問項目の「五年生までに
受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機
器を、どの程度使用しましたか。」の回答結果
を見ました。すると、『ほぼ毎日複数の授業で
使用』が、全国二十数%に対して、七十%を超
えていたことに衝撃を受けました。因果関係
は分からないのですが、ICT機器をふんだん
に使うことが、学力を伸ばすことにはつながっ
ていなかったことも分かってきたのです。

酒井邦嘉氏（東京大学・言語脳科学）は、
電子機器よりも、紙に手書きで記入するほう
が、紙と文字の位置関係など周辺情報も一緒
に深く記憶されるために、忘れにくく想起し
やすい、と述べられています。日本より10年
早く一人一台端末を導入したスウェーデンは、
教育のデジタル化を見直しました。日本は五
年目。積み上げのある学校教育の、紙と鉛筆
による学習、学力研の実践を、時間をかけて
取り組むことが希望だと思っています。

○ 集団の学力の底上げを

サッカーワールドカップ2026が行われま
す。日本が出場できるまでになったのは、他の
国が弱くなったからではなく、日本のサッカー
も強くなったからだと言われています。その理
由に、子どもたちの習い事で、サッカー人口が
増えた、経験者が増えていることがあるので
しょう。それは、サッカーというスポーツの力を
つけた人の数が増え、力の底上げが行われた
からではないでしょうか。それもサッカー選手
になることだけが目当てでなく、指導者やコ
ーチになる人、練習場を経営する人、スポー
ツ用品メーカーに関わる人など、いくつもの方
面からの関わりが生きています。学校でつけ
る学力も、学習は、「できる子だけ」「やりた
いことだけ」していればいい、では、「できるで
きない自己責任」になり、たまたま伸びる
子だけ伸びる、に終わってしまいます。それでは
全国的な『学力低下』を乗り越えることには
なりません。学校だからこそ、集団の学力
を、学校ぐるみで取り組んで底上げする、そ
んな形を目指したいと思っています。

特別寄稿

学力づくりのジタバタ物語Ⅱ

愛知 春日井サークル 山口左知男

1 跳び箱と群読 ― 大学の授業から

この間大学1年生の授業で二つの動画を見せました。

一つは跳び箱の台上前転です。4年生の子たち全員が6段を回っていました。台上前転のつまずきは「こわさ」です。「すごい!」「みんな上手!」 私「ありがとう。では、助走は何歩でしたか?」「7歩です」「5歩です」画像は一生懸命見てくれていました。が、そこまでは難しかったようです。

私「助走は3歩です。トントントーン、これだけです。4段まではロイター板の上でトントントーンだけ。ここに跳び箱の一番大事なポイントがあります。」跳び箱は危険な種目です。子どもはこわいのです。助走をつけるほどこわくなります。子どもの身になってこわさを一つずつ取り除いて思い切り挑戦できるようにしてやるのが教師の

仕事です。練習は0段マットから。次は1段マット付き。その次は1段。必ず着地ができるようになります。着地ができて初めて子どもは安心します。全員出来るようになったら次へ進みます。」

「跳び箱の動画を見て、みんなが台上前転ができていてすごいなと思いました。しかし、これは先生が子どもたちにできることから教え、できる喜びや達成感を味わうことで、自分から上のレベルを目指すようになるんだということが分かりました。」

(学生)

もう一つは群読です。群読のテーマは「楽しく声を出す」ことです。「子どもたちが全身で群読している」「表情が生き生きしている」私「ありがとう、楽しいからです。楽しさをつくるには、絶対一人で読ませないことです。恥ずかしさ、そこに音読のつま

ずきがあります。みんなで読む中で安心して気持ちほぐれ、自信をもって楽しんで読めるようになります。大きな歯切れのよい声は結果であり目標ではありません。言葉遊びを楽しむ、全授業で音読する中で、声を出すことが自分の学校生活の一部になってきます。みんなが音読好きになると、クラスに活気が出て授業に規律が生まれ言葉に関心が出てきます。」

「印象的だったのは群読の動画で、みんなが堂々と楽しそうな様子で、僕が小学生のときのやらされていた群読とは違って、すぐく主体性を感じ、こちら側の教育者の接し方でこんなにも変わるんだと衝撃的だった。」(学生)

短い単純な動画でしたが、私の実践のスタンスをうけとめてくれていました。どちらも、失敗をこわがらない、こわがらせない、みんなで失敗を大事にするクラスづくりの上に成り立っています。学生たちは、自分の受けてきた授業との違いをつかんでくれていました。

動画の後に、学生たちと言葉遊びをし

した。途中からみんなに笑顔が生まれ楽しく群読できました。「途中でおっしゃっていた『教師はバカにならなきゃ』という言葉がとても印象に残った。谷川俊太郎の詩をみんなで読んでいるとき、先生が誰よりも大きい声で朗読を楽しんでいるのが伝わったとたん、みんなに笑いが起きて声が大きくなった。」(学生)

学生たちには私がジタバタ実践していた頃の話をよくします。この後も延々と失敗話をしました。学生たちは私の失敗話にほっと安心、笑顔で耳を傾けてくれました。クラスの「安心」が「解放」を生み「集中」をつくるという話にも共感していました。

2 安心・解放・集中 ― 子どもたちの求めるもの、ハマるものは何か

大学生たちの感想を読みながら思い浮かんだいくつかのジタバタ実践を認めます。学力って何者か、子どものやる気と学びはどうしたら伸びるのか少し考えてみます。

1つ目。担任を卒業するまでの最後の10年間で私は4回ほど「崩壊」している持ち手のない学級を担任しました。いずれも

中学年で、ほとんどが単数学級でした。初めてそういう3年生を受け持ったときのことを書きます。

彼らは、2年生時に担任の指導が入らず、毎日のように管理職が指導に出向くが効果なくお手上げという状態の子どもたちでした。生徒指導を担当していた私は、彼らのことは無論知っていましたが、実際に受け持つてみるとここまでかと思えました。

4月の懇談会資料です。「多彩な個性・様々な力にあふれるパワフルな33人」「到達段階にかなりの差がある(文字を書くスピード・丁寧さ、計算の速さ)」「隣の人に対する関心が低い(優しいサポート・注意ができない)」「騒々しさに対する慣れと集中力の不足(集中が遅い・根気が足りない)」「一つの行動から次の行動への切り替えが遅い」「席をすぐ立ちたがる人が目立つ」「人を傷つける言葉遣いとしつかり返事ができないこと」「クラスみんなで遊ぶことがない」。必死でプラス面をひねり出しましたが、「パワフル」「読書好き」以外は出てきませんでした。無論懇談会資料なのでかなり控

えめに書いてこうですから、一口に言えば、とても暴力的な雰囲気満ちており学ぶ習慣がないということです。

始業式の写真撮影・教室移動から大宴会状態。思いやられると思っていいたら、昨年の学級の様子を熟知する校長先生から出た言葉にびっくり!「今日はみんなとつてもお利口でした。よくがんばった!」は?目が点です。この日の活動は即変更。校内の他教室の授業観察と静かに校舎内を歩く練習で終わりました。おかげで、私は教科書を配ることすら忘れてしまいました。

翌朝からは、私が教室へ行く前に、朝一で子どもたちが職員室にやってきました。「先生、〇〇くんが泣いています!」「〇〇くんが殴られました」と授業以前の暴力行為、いじめ行為がひっきりなし。驚いたことには、教室にかけつけると、すぐそばで大声で泣き叫んでいるのに涼しい顔で読書に励んでいる子が何人もいました。つながり度0という感じ。毎時間のように休み時間が終わるたびに誰かが泣いていました。私は、朝は必ず教室で子どもたち全員を迎

えるようにしました。朝一番から帰りの会が終わるまで、目を離すと暴力行為が始まるということで、全く気の抜けない毎日でした。

しかし、何といつても一番苦労したのは、授業を成立させることでした。ほかつておけばだれかの一言からエンドレスに飛び交うなじり合い、傷つけ合い、ものを集めるたびに回り道をしてちよっかいをかけてはけんかになるという集中力とは無縁の授業になります。荒れた中3相手にも、普通に授業をしていた私が唾然。5時間など到底無理。私は、朝の会とはじめの2時間に絞りました。毎日1限国語、2限算数です。子どもは必ずどこかにハマルものがあるはず。子どもがハマルものの中に実践の切り口があります。彼らの場合は声を出すこと、体を動かすことと読書でした。そして、何よりほめられることが大好きなところでした。そこに光明を求めて突き進みました。まず、とりあえず朝一番から気持ちよく1日を始める。朝落ち着いて本を読み始めると全員が集中し始めます。とにかく読書

でできた落ち着きを朝の会の朗読・群読で心地よいリズムに変えてトントントーンと授業のノリに変えていく。国語・算数に絞って子どもたちに合った学習規律をつくることを重視しました。

① **まず、とにかく朝の会から全員でリズムカルに声を出しまくる。言葉遊び、群読、三字漢字、リズム漢字、一斉音読、グループ音読**。子どもたちがノリにノッて疲れ果てるまで声を出す。私語の隙間を与えない。そして、教科書に集中させる。

② **「ライバルは昨日の自分」「昨日の自分に勝つ!」を合言葉に、毎日の計算ずもつで基礎計算に熱狂させる。**

③ **板書は1パターン、授業の組み立ても軌道に乗るまで一切変えない、1時間の授業の筋道を頭に叩き込む。**

④ **国語・算数ノートは毎日点検、書き直しを徹底し、授業中目を黒板にくぎ付けにする。**

この4つを柱に授業改革をしました。そして、ささいなこともほめてほめてほめま

くる「ホメホメ大作戦」。切り替え名人、準備名人、たくさんの名人が登場しました。

これは、彼らをすぐその気にしました。朝勉強は読書、問題が解けたら読書、ノートを書き終わったら読書、隙間の時間はすべて読書。彼らの取柄である「読書好き」を利用して生活習慣を「読書づけ」にしました。「教師はバカにならないといかん」とは言うものの、2時間思い切り授業をすると、私もクタクタ。休み時間はさっさと職員室に引き上げ、明日の学級通信で何をほめるか考えながらコーヒーブレイク、体力回復したところでまた戦闘開始。

もう一つの柱は体育でした。体育をクラス活動の中心に置きました。体育については私は全くの門外漢です。学校体育同志会（以下同志会）と久保実践に学びました。

16年間中学校に勤めていた私は、小学校に転勤すると同時に、同志会の本を多々買い込み、器械運動と陸上運動を徹底的に勉強しました。それらと当時購入した久保先生の「青本」『子どもと伸ばす一斉授業』を使い、目の前の子どもたちに有効な実践

を考えました。「青本」で学んだことは、3
種目サイクル学習でした。私は「リレー」

「鉄棒」「ドッジボール」という3つを15
分間ずつ4月初めから連休明けまで1か月
半続けました。1・2年生の2年間で完全
に強い者が支配するピラミッド構造になっ
ていた彼らには、このやり方がピタリで
した。器械運動はボール運動を中心につく
られた運動。ピラミッドを根っこからひく
り返しました。地味に頑張っている柔軟性
のある子や女子が一躍脚光を浴びました。
特に鉄棒は中学年で衝撃的に力が開花し難
技に取り組めるようになります。リレーは
脚力のない子にとっては頭腦的バトンタッ
チで一気にチームを引っ張るチャンスです。
ドッジボールは運動自慢のやんちゃ坊主連
中をリーダーにワンバウンドドッジで投げ
方・受け方を身につけレベルアップします。
リレーとドッジはグループ会議が子どもた
ちの相互交流の場となり、会話が広がるよ
うになりました。これは大当たり。全員が
かわるがわるどこかで主役になり盛り上が
りました。そんな中でやんちゃ坊主たちの

姿勢がだんだん変わっていきました。人の
意見を聞き認めほめるようになりました。
地味に運動ができる子や鉄棒得意の女子た
ちも自信を持ちました。

授業改革が縦糸なら、横糸は安心の場づ
くりです。毎時間子どもが泣いていては話
になりません。横糸づくりの要は、まずは
久保式おとなりさん活動。周りに無関心な
集団では、グループ・班は大きすぎます。
まずはおとなりさん。授業は絶えずおとな
りさんを視野に入れ、おとなりさんと二人
で伸びる、そういう姿勢をつくっていきま
した。○つけ、間違ひ直しの教え合い・話
し合い、2人納得したら2人で手を挙げ2
人でノートを持つてくる、集めるものは何
でも2人、発表のリハーサル、朝のニュー
ス活動などなど、おとなりさんべったり活
動を徹底しました。困ったときは何でもお
となりさん。自分に自信をもち活動に参加
できるようにするために、となりの人の活
動に関心を持ち関わり合うために、4月1
か月間、必死で仕込みました。

2つめは、遊びです。外遊びが好きな子

が多かったので、クラスレクを毎週やりま
した。毎回計画をきちんと話し合い、毎回
まとめをきちんとやりました。休み時間の
短いレクでも。初めはもめ事が多く授業が
始まってもし泣いている子がいましたが、毎
回きちんと学び少しだんだん楽しいことが
自分たちでできるようになっていきました。
3つめは、もちろん「脱暴力」です。3
年生と言っても手加減せず手足を出すので
すから、いつ大事件になるとも限りません。
暴力事件が起こると、必ずその原因とどう
解決すればよかったかを給食の時間にみん
なで話し合いました。「泣きながらでも授業
は受ける。問題の解決は給食中」です。小
さな暴力も見逃さず繰り返し話し合い解決
しました。「脱暴力」はだんだんクラスに浸
透していきました。

子どもを「ノセて」子どもが「ハマる」
ことを第一にした結果、2時間が4時間にな
り、1学期が終わるころには集中力が高
まり、午後も授業を頑張れるようになって
いきました。おとなりさん活動や体育・レ
クのお陰でクラスの雰囲気も4月当初とは

大きく変わって和やかになり、男女の仲もだんだんと良くなっていきました。(その後彼らは6年生になっても、男女で休み時間に運動場で元氣よく遊んでいました。)集団への安心感が高まる中で一人ひとりがいろんな場面で自分の意見をはっきり言えるようにもなっていました。学力の面でみると、学習習慣が定着するとともに、学ぶ意欲と集中力が高まり、その一方でつながり力も高まってきました。それに伴い、逐語的読解力や基礎計算力・基本的な文章題の理解という点では全員力が伸びてきました。私のジタバタもそれなりに成果が表れ、子どもたちにも親にも信頼が生まれたようです。ただ、この頃の実践の問題点は、学級崩壊後のクラスという状況ではありましたが、子どもを「対象」として見て「操作」するという側面が少なからずありました。子どもを「主体」として前面に捉え「成長」「全面発達」を一番にするという点がやや弱い実践ではありましたが、その後荒れたクラスの学力回復に取り組む際の基本的な取り組み方にはなりました。

大事なことは、荒れる子どもたちが求めるものは何か、食いつくことは何か、それを徹底して考えそれを切り口にすること、そして、安心を足場に子どもたちが関わりつながらながら学習に向かう実践を組み立てていくということだろうと考えます。

3 学力は転移する

2つ目。定年のときに受け持ったのつくんの話です。

のつくくんは、普段は、笑顔いっぱい、にこにこ顔ののつくんで、みんなの弟分という感じの子でした。クラスの子どもたちも、のつくくんの優しいお人よしのところもよく理解しています。のつくくんは、ノリがよく、チクサクコールが大好きで、毎週金曜日の帰りにになると、「チクサクしよー」と私にせがみました。

雨雲や雨音に怯えタオルをかぶり、地震・雷が起ると絶叫号泣。天気予報に異様に詳しく、大雨や雷の注意報が発令されると詳しい時間まで覚えていました。予定が急に変更したり予期せぬ事態が起こったりすると「なんで！」と混乱。指をはさん

だりすると、乳児のようになきじやくりました。

こだわりが強く、「○○が気になる」ということをよく口にしました。自分が声を出すことは気にならないが、人の特異な言動は人一倍気になります。朝会や運動会練習などでも、他学年の気になる子には、しつこく感情的になっていました。かつとなったり、授業に参加できない状態になると、となりの部屋へ行つて待機。となりの部屋から授業を受けることもありました。

のつくくんは、8か月の早産で、就学前コロニーで、健常な子と同じような成長を望むことは無理という診断を受けていました。母親は病院のメスをつくる仕事に携わっており忙しく、家庭での世話は同居する祖母が行っていました。一つ上の姉が心の支えで、傍にいと人前でも抱きついたり、べたべたしたり嬉しそうでした。姉が休むと「寂しい」とよくこぼしていました。のつくくんは、宿題をほとんどやらず、ノートもたどたどしい字でした。今年少し宿題をやるようになったので、クラスの女子

が驚いていました。これで「すごい！」と言ってもらえるのだから幸せです。算数には自信があつて、計算力があり、はまってくるやたら問題をやりたがりました。漢字は全く覚わつておらず意欲ありませんでしたが、毎日の宿題もなかなかやりません。ただ、授業の漢字学習は意欲的で、リズム漢字・三問勝負にはがんばりました。4年生になつて、音読をやる気になつてきたようで、宿題も音読はやつてきました。毎日クラスで行う朝の音読が心地よいように、大きな声で練習に取り組んでいました。

10月に、姉がマイコプラズマ肺炎になり、2週間欠席しました。それをきっかけに、のつくくんは、不安定な状態になりました。イライラを解消できず爆発することが増えてきた。人をたたいたり、授業中には鉛筆の芯を折つたり、ノートを破つてすてたりしました。

音楽等、入りの先生に対する態度がひどく、のつくくんのパニックに影響され、クラス全体に落ち着きがなくなつてきました。入りの授業が終わつた後、心配した子どもたちが私に訴えてくるようになりました。お世話されるのが心地よかつたのつくくんの成長とも考えられました。

そんなときに、基礎学力コンクールの取り組みが始まりました。学力補充をしてコンクールに取り組み、その後再びさかのぼり学習するという学校全体の取り組みです。1学期の様子から、普通の取り組みではのつくくんを伸ばすことは難しいと思つていましたが、今の状態では、取り組み方次第では、のつくくんの感情の振れ幅がもっと大きくなるのではないかということを心配しました。

そこで、「のつくくんがんばりプリント」を考え、取り組みさせてみることにしました。彼は、授業中の漢字勉強は常にしつかり声を出しきちゃんと取り組んでいました。社会の「かつとばせ都道府県」も大好き。耳から入ること、リズムに乗る勉強ならできるのではないかと考えました。授業をそのままプリントにしてみました。のつくくんの反応はどうかあと思いながら話をしたら、彼は真顔でのつてきました。本人と家庭に、プリントの中身とやり方についてきちんと話をし、取り組みを始めました。しかし、私はやつてくるか半信半疑でした。

1日目。私の心配とは裏腹に、のつくくんはきちんとプリントをやつてきました。のつくくに申し訳ない気持ちでした。3日たち、5日たち、のつくくんの字は少しずつ丁寧になつていきました。基礎学力コンクール当日までのつくくんの頑張りは続きました。

基礎学力コンクール当日、みんながトンと進んでいく中、のつくくんも目つきがいつもと違つていました。30分経つて2時間目が始まつても、のつくくんは「もう少し」と粘つていました。いったん覚えた漢字なので、何かのきっかけで思い出していき、最終的には、2時間かけて7割ぐらい書いていました。その日一日中、会えば「もう採点した？」とニコニコして聞いてくるのつくくんは、初めて漢字の点数が気になつ

ていました。結果は55点。大喜びでした。

「がんばりプリント」に取り組み始めてから、のつくくんはめつきり落ち着いてきました。トラブる回数も減り、トラブっても話題を変えると、すぐに気持ち切り替わるようになってきました。落ち着かないときも、しん折り、紙破りから牛乳キャップさわりに変わっていきました。作文も毎日書くようになりました。連絡帳の字も丁寧になり、少しずつ毎日の評価を気にするようになってきました。

このころから、それまでは、自分と人を比べるということをほとんどしなかったのつくくんが、言葉に出して人を意識するようになってきました。「明美ちゃんより漢字テストがよかった!」「先生、亮くんの今日の連絡帳はB? (私は連絡帳にいつも評価をつけていました。)」子どもたちには、「ライバルは昨日の自分」自分の中の成長を喜び、人の成長と比べないようにいつも話してききましたが、のつくくんにとっては、人と自分を比べるようになり、人との関係で自分のやる気を高めていることは、自信の表れで

あり、成長であると思いました。

個人懇談で、お母さんは「自信が出てきたみたいですよ。漢字がちよっと好きになったと言っていました。宿題も忘れずにやるようになりました。算数の結果は『くやしい! (91点)』国語の結果は『やったー!』と言って持ってきました。3年生のころと違って音読がとても好きになりました。連絡帳も毎日書くようになり、読めるようになってきました。」お母さんも、漢字の取り組み・結果をのつくくんと大喜びしたそうでした。冬休みの宿題も、のつくくんだけは、「のつくくんがんばりプリント」を続けました。

3学期に入ってから、「のつくくんがんばりプリント・ニューバージョン」を始め、1年間の漢字まとめテスト制覇を目指しました。目標がはつきりすると、途中挫折しかかったこともありましたが、何とか持ち直し、結果は51点。前回とあまり変わらない結果に、のつくくんは喜んでいました。

のつくくんは、2学期に始めた「さよなら勉強」が大好きでした。帰りの会が終わっ

たら荷物をもって私の前に並んで先生問題を解いたら「さよなら」します。「面積の単位」や「たして100」など規則的なものが好きで、特にa、haの変換等はクラスで一番先にきっちりできるようにしました。のつくくんは、規則的な変化とか公式的な計算利用等が好きで、きっちり答えができてくると、とても心地よさを感じるようになってきました。

3学期に入り、のつくくんは、ますます字を気にするようになりました。なぜ「字」なのかは分かりません。3月終わりにみんなに書いてもらった「私が1年間で成長したこと」には、のつくくんはこう書いています。

「ぼくが1年間で成長したところは、連絡帳です。理由は、1回CCを取ってしまっただけ、BとBを最高(オマケもふくむ)35連レンサ(連ぞく回数)です。なかなかB○○、Aが取れません。めあてはB○○です。あと、Bを10回連ぞくすることがしたいです。」

連絡帳の字のことしか頭に残っていないぐ

らい執着するようになっていました。

のつくんは、基本わり算5分50問へ、2月に燃えました。基本計算は、4月から、かけ算・たし算・ひき算と取り組み、7月から、あまりのないわり算・繰り下がりのないわり算、10月から、繰り下がりのあるわり算へと進んできました。クラス全体が盛り上がってきたのは2月頃でした。のつくんも毎日「昨日の自分に勝つ!」と吠え、基本計算に取り組み、5分70問をやりとげました。

始めは、規則的なもの・機械的な計算だけが好きなように見えたのつくんでしたが、次第に算数の文章題、国語の読解問題にも力を発揮するようになってきました。読解では3学期にテストをするたびに上がり、2学期には50点前後だったのが、3学期には71・75・81点と上がり、最後のテストでは95点を取りました。クラス全員がでなかった理科の問題も、落ち着いてごまかされずに正しく解くことができました。落ち着いて文章を読み内容を理解することができるようになってきたのです。

それは、自信と表意文字である漢字習得の力が大きいのではないかと思われます。また、毎日宿題をきちんと続けていった中でしつかり読み取る根気もできてきたように感じられました。できたこととがんばれたことによる自信でした。

自信という点では、3学期にこういうできごともありました。のつくんは、極端なこわがりです。雷のことだけではありません。ドッジボールをすれば、ボールをこわがって逃げる。自分の倒立はできるのに、人の倒立が怖くて受け止められず自爆させる。

みんながドッジボールをあまり上手でなかったこともあり、自信をつけるために、まずボールをちゃんと投げる練習をしました。その繰り返しの中で、のつくんもかなり自信ができてきました。同じようにボールから逃げまくっている子と二人で、ボールを下にたたきつけ、ワンバウンドで受け止める練習を繰り返ししました。のつくんは、練習・練習試合を繰り返す中で、だんだんボールをこわがらなくなり、練習試合でも

ノーバウンドで強いボールを受け止められるようになっていきました。受け止めることができるようになると、すっかり自信が生まれ、ドッジボール大好き人間に変身しました。

倒立も、体で止める練習を繰り返す中で、きちんと手で受け止め、補助できるようになりました。マットの立ちブリッジも同様でした。のつくんは、いつまでもこわがって、人の補助に頼り自分で体を支えようとしませんでしたが、教室へマットを持ち込み、毎朝段を変えてみんなで練習する中で、のつくんもだんだんとできるようになってきました。もともと体の柔らかいのつくんは、できるようになると調子に乗り、「ブリッジ跳び箱」に挑戦するようになりました。体重の重い子でもしつかり支えることができるようになったので、自信満々。卒業生を送る会では、全校の前で、「へんしんとびばこ」の劇の中で、ブリッジ跳び箱を取り入れることにしました。見事に成功させ拍手喝采、大喜びでした。

一つの学力の伸びは他へ転移します。

4 学力は人格をつくる

3つ目。最後に担任したクラスの恵美ちゃんの事です。

恵美ちゃんは、クラス1のパワーの持ち主で、ぶちっとキレると、先生だろうが誰だろうがお構いなしに食って掛かり、1時間も2時間も興奮状態、キレ状態からもどってこれないという子でした。語気の強さとワル言葉、圧倒的な体力に、子どもたちはすくんでしまいます。低学年の頃のキレ方とはにかくすごかったそうで、2年生のときに担任した男性の先生は「しょっちゅう罵られました。殴られたり蹴飛ばされたり大変でした。」と話していました。低学年の頃にADHDの診断を受けていますが、同じクラスの親たちから要請があり、病院へ行ったそうです。気が向かないと「やだ！やらん！」、一つ歯車が狂うと自分の気持ちを切り替えることができません。「売られたけんかは買わない！」この言葉を自分に言い聞かせて毎日を通してました。

恵美ちゃんが大きく変わってきたのは、2学期後半でした。一つ目は、跳び箱の授

業でした。体重があるせいで馬跳びができない恵美ちゃんは、跳び箱に最初から消極的でした。「どうせ、できんもん！」と半スネ状態。ならばできるところからと、4段をクリアできなかった子たちと一緒に、低学年用のミニ跳び箱から始めてみました。3歩跳び（ケンケンパッ！）でトライすると、ジャンプして跳び箱を跨げるようになりました。「できるじゃん！」と言ったら「これでいいの？」「いいの」。助走が短ければ短いほど、子どもたちはこわがらず思い切り向かってくるができます。

何回かやってみたら、恵美ちゃんのお尻がふわっと浮いて、跳び箱の最前列にゴツン。もう跳べている！「それでいい！もうできてる！」ちよつと私が興奮してきました。ここまで来たら、もう大丈夫！2・3回続けると見事にクリアしました。いい笑顔でした。このあたりから、恵美ちゃんはどうどん積極的になり、最終的には6段を楽に成功させることができるようになりました。

恵美ちゃんのがんばりは、台上前転でも

続けました。最初は、跳び箱の上の前転が怖くて、例によって他のできない5人と跳び箱の1段の前で立ち往生。それではと、跳び箱の上にマットを敷いてみました。恐る恐るやってみたら、全員ばっちりクリアでした。恵美ちゃんもきれいに回ることができました。一つハードルを越えた恵美ちゃんは、「1段がんばり組」のリーダーとしてがんばりました。マットありの次は、1段マットなし。これを全員クリアすると、2段マットつき。このあたりから私はジャンプと着地にこだわっていきます。「トーン！クルリンパッ！」着地ができるようになると、みんな怖くなくなっていきます。次は、2段マットなし。この調子ですごい勢いでどんどんチャレンジ。3段まで見事に突き進んでいきました。「はじめスネてたのは誰だっけ？」そんな思いの私でした。その後の体育にもその勢いは続きました。走り幅跳び。「できんもん！」またまた出ました。立ち幅跳びからはじめました。次、一歩跳び。全員問題なし！次、3歩跳び。これも問題なし！次、助走ちょこつと跳び。

みんないい感じ！という調子で、恵美ちゃんもみんなと一緒に走り幅跳びクリア！

ハードル。「去年全然できなかった！」「でも、跳び箱も幅跳びもできたじゃん！」「うん」「言った通りやれば必ずできる！」「しゅぶしゅぶ始めた恵美ちゃんでしたが、初めの1時間が終わるころには目が変わってきました。ミニハードルをぴよんぴよん楽しそうに跳んでいました。超スモールステップは、どの子も伸ばします。

二つ目は、漢字マラソンでした。太したことをやるわけではありません。新出漢字の勉強のすき間の時間を使って、プリントに黙々と漢字を書きまくるだけ。故有田和正氏曰く「鉛筆の芯から煙がでるまで書いて書いて書きまくれ」です。

ところが、恵美ちゃんは、2時間目ぐらいから、猛然とはまったように漢字マラソンに取り組むようになりました。まさに「はまった！」新出漢字のなぞり書きが終わると、すごい勢いで書き始めます。3時間目ぐらいでクラストップになり、以後ぶつちぎりです。毎時間がんばり続け、2週間ほどで

20枚に到達しました。何でそんなにがんばっているのか、私にも分かりませんでした。きつと目標がはっきりして、短時間でしつかり成果が見えることが快感だったのでしょう。とにかくすごかった。この「はまった」状態は、新出漢字の勉強が全部終わるまでずっと続きました。おかげで、その後の漢字小テストも、1学期と比べてぐんと良くなり、「漢字はやれる！」という自信につながりました。

2学期の勉強の中で、恵美ちゃんはキレることがとても少なくなりました。図工の作品がぐちゃぐちゃになっても、「もうやらん！」ということもなくなりました。友達にもキレることが減ってきました。キレても切りかえが速くなり、次の授業からは、何事もなかったかのように参加できるようになりました。教育相談・個人懇談では、授業のがんばりとキレた後の立ち直りの速さを誉めました。

3学期は、算数で伸びました。小数計算を最後まで食いついてがんばりました。かけ算から最後のわり算の概数計算まで、投

げ出すことなしに一生懸命やりました。班での取り組みも、トラブることがなくなりました。社会科の班学習、テスト前の大質問会、理科の実験、とても仲良く笑顔で最後まで行えるようになりました。いい感じで協力して清掃活動や給食活動にも取り組めるようになり、友達に食ってかかったり、突然掃除をやらなくなったりすることもなくなりました。外で男子たちと体を動かして思い切り遊ぶという様子をよく目にするようになってきました。

自信を持つて意欲的に学習に取り組めるようになること、落ち着いて取り組む姿勢ができることは、恵美ちゃんの生活を大きく変えていきました。人に向かって吠えたり、キレたり、向かっていくこともすっかり無くなっていきました。自然と周りの子どもたちの見る目も少しずつ変わっていきました。班がえのときに行うアンケートでは、彼女が苦手と書く子はいなくなりました。

3月終わりに彼女が書いた「私が1年間で成長したこと」。学力は人格を高めると確

信します。「わたしは、1学期や2学期は、ちよつかいをいっぱい出していたけど、3学期になってから、1学期や2学期よりもちよつかいをださなくなったなと思いました。それに、1学期や2学期は、音楽室に行かないで教室にいるというのも（あったけど）、3学期になってからなくなったなと思います。それから、1学期・2学期よりも、算数が得意になったなと思いました。わたしの苦手な音楽や社会、理科、算数とかも、少しだけ好きになったりしました。

（後略）」

5 子どもを「見る」ということ

のつくんや恵美ちゃん、荒れる3年生の子どもたちから学んだことは、子どもの成長は、やはり「子どもをきちんと見る」ことから生まれる、ということです。のつくんや恵美ちゃんが学習に前向きになり学力を回復していく契機はトラブルからでした。のつくんの場合は、度重なる悪態や暴力、授業中のパニックと目の前の漢字という大きな課題が彼という人間をもう一度

見つめ直すきっかけになりました。恵美ちゃんの場合も、日常的な暴力・暴言の連続に加えて、跳び箱に全く取り組もうとせず感情的に半ボイコットするという突発的行動が彼女を見つめ直すきっかけとなりました。のつくんや恵美ちゃんは、口では「できんもん!」「もうやらん!」と言いながら、私が助けるのを待っていました。ちょうど跳び箱や漢字という教材がそこからのジャンプの橋渡しをしてくれました。きちんと目の前の子どもを見つめ、手立てを尽くせば、どの子も伸びるということを改めて教えてもらいました。

子どもの発達は、すべて関わりがあり、伸びるときは一気です。学力の伸びは人格の成長につながります。一つ一つ壁を乗り越えた彼らの中の自信が新しいものに向かつていく意欲につながっていき、情緒の安定をつくっていきました。

どうせできんもん」と学習に投げやりになっている子どもほど、できるようになったときの喜びは大きく、自信も深いです。子どもの学びの契機や方法は一つの筋道で

はありません。それを傍で寄り添って見ている教師がおり、子どもとともに試し見つけていく中で生まれてくるものです。教師が種々の失敗をし、あちこち寄り道をしながら自分の実践にたどりつくように、子どもたちも沢山の失敗や経験をしながら、自分のハマる学びにたどりつきます。その道がばつと開いたときに、一気に加速度的に学びは伸びます。そして、転移していきます。子どもたちとのジタバタの中でハマるものを見つけ合い、それをきっかけに子どもたちをつなげ伸ばしてやるのが教師の仕事ではないかと考えます。

今日本の巷で無理やり導入されあまたの問題を起こしている自由進度学習を子どもたちに無批判にあてはめていくような教育では、学習からリタイアしようとしている子どもたちは決して救えません。彼らはますます教室の隅へ、外へと追いやられていきます。それは教師の責任を放棄した行爲です。長年の私のジタバタから生まれた結論です。

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

1. はじめに

学力低下と教育現場の課題、

そして私の取り組み

文部科学省が2025年7月に公表した「令和6年度 経年変化分析調査」では、小学校6年生と中学校3年生の全教科で平均スコアが低下していることが明らかになりました。この学力低下の背景にある要因と、それに対する私の取り組みを報告します。

2. 学力低下と教育現場の課題

まず、探究学習やICTの導入が進む中で、先生方の中には「これで子どもの学びは大丈夫」と思い込んでいる方がいるかもしれません。探究学習もICTも、子どもたちの可能性を広げる素晴らしいツールであることは間違いありません。しかし、それらが万能薬のように捉えられ、基礎学力

の定着という土台がおろそかになってしまいうと、学習のバランスが崩れてしまいます。次に、基礎学力を着実に身につけさせるための取り組みが、十分に行われていない現状も指摘できます。そして、宿題の減少も、学力低下に繋がる大きな要因の一つだと考えられます。宿題が減ること、家庭での学習時間が失われ、学習内容が十分に身につかず、結果として学力に差が生まれる可能性があります。これらの課題に対し、私も現場で日々試行錯誤しています。

3. 1年生の取組み

これらの課題を解決するために、学力向上のためには、探究学習と基礎学力定着のための学習を、バランス良く組み合わせることが重要だと考えています。1年生の学級では、以下の取り組みを実践しています。

(1) 基礎学習の徹底

1年生ではノートに書くことや、視写を重要な課題として取り入れています。これは、手本となる文章を丁寧に書き写す活動を通して、文字の形や読み書きの基礎を楽しみながら習得できるものです。子どもたちは集中して取り組む中で、自然と漢字や語彙に触れ、楽しく学びを深めています。

この取り組みは、基礎学力の向上だけでなく、集中力や丁寧さも育む良い機会となっています。これはまさに、『シン・読解力』が強調する「情報の整理と構造理解」に直結する活動と言えるのではないかと考え実践しています。また、視写は、長時間にわたって集中力を維持し、正確に作業を遂行する訓練になります。この集中力と粘り強さは、複雑な文章を読み解き、論理的な思考を構築する上で不可欠な、見えない学力（非認知能力）だと考えます。

(2) 視写の可能性

かつての日本の教育現場では、「視写」が

基礎学力向上のための重要な学習活動として広く実践されてきました。現代の多様な学習方法が確立される前、視写は文字の習得から精神性の涵養に至るまで、多岐にわたる教育効果が期待されていました。

■昔の視写実践の目的

文字習得として、正確な筆順・字形・書写技能の定着

語彙・表現・文理解の促進
集中力・忍耐力・根気の養成

昔の視写では、単に書き写すだけでなく、指導者による具体的な指導介入が重要視されていたそうです。

デジタルデバイスの普及により書く機会が減少している現状において、手書きによる視写は、脳の発達を促し、より深い学習へと繋がる可能性を秘めていると言えるでしょう。先人たちの知恵を現代に活かし、視写の再評価と実践を通じて、児童の総合的な能力向上を目指すことができます。

■聴写が強化する能力

聴写は耳で聞いた情報を記憶し、正確に

文字に変換する能力を育みます。

音を正確に聞き分け、その音を文字として想起する力が養われます。これは特に国語の聞き取り問題や、言語学習全般において重要なスキルです。

また、短い文章や語句を記憶し、保持しながら書き出すことで、一時的な記憶力（ワーキングメモリ）が鍛えられます。

そして、言葉の音と文字との関係性を明確に認識する力が育まれ、正確な表記へと繋がります。特に漢字の同音異義語などを区別する際にも役立ちます。今後は聴写にもチャレンジしていこうと考えています。

（3）家庭学習の工夫

家庭学習は、学校で学んだ内容を定着させる上で不可欠です。宿題の量や形式を見直し、子どもたちが自律的に学習に取り組めるような工夫を凝らしています。例えば、単純な反復練習だけでなく、思考力を養うような短時間の課題を取り入れたり、保護者の方が子どもの学習状況を把握しやすいような工夫を施したりしています。また、

家庭での学習内容を学校で発表したり、振り返りの時間を設けたりすることで、子どもたちが「家庭で学んだことが学校で役立つ」と感じ、学習への意欲を高められるように促しています。1年生の宿題として「逐語的読解」の問題を毎日取り入れています。

何よりも、家庭学習における保護者連携の重要性を感じています。宿題の教育的効果を最大化するためには、保護者との連携が不可欠です。児童の家庭学習への関与は、学習環境の整備とモチベーション維持に重要な影響を与えます。

4. おわりに

子どもたちの未来のために

『シン・読解力』が訴えかける、本質的な読解力と、それを支える多様な能力。一見アナログに思える「視写」という活動が、これら現代社会で求められる力の育成にこれほど深く貢献するという事実には、私は確信を持ちました。

低学力問題に対して理科専科としてどう取り組むか

①教科書の音読を毎回、必ずどこかでする。

読字力、語彙力をつけるため、脳を活性化するため、授業の中で、どこかで必ず音読（連れ読み）を入れる。教科書を読むときは、背骨を伸ばさせ、教科書を立てて両手で持つようにさせている。4月からそうすることの趣意を話し、長期休み明けには、再度、その趣意を語り、机間巡視しながら、上記のことができているかを指導している。連れ読みの一斉読が揃わないクラスや、語尾を伸ばして読む子などがあるので、適宜指導している。各クラスでの音読の取り組み方が反映するが、理科は理科として指導している。

②ノートに、日付・何時間目か・天気・温度を毎回、書かせる。ただし、温度を書かせる前に、室内の温度を予想させて手を挙げさせる。

理科の教科の特性として、何月何日の何時間目はどんな天気で室温は何度かを記録させていく。温度予想するときも、何日前の晴れのときは何度だったので、今日も晴れだからだいたい同じだろう、というように予想させていく。毎理科時間やり続けることで、体感で何度かが分かるようになっていく。

③単元の最初には、その学習に関する事前知識を発表させ、情報交流させる。

3年理科の「風のはたらき」の学習なら、「風がふくと何がどうなるか」を書かせて発表。6年理科の「てこ」の学習なら、「重い物を小さい力で持ち上げる方法」を書かせて発表。「水について知っていること」や「地震について知っていること」などのように書かせて発表させ、質疑応答もさせていく。書く目安として、「3個書けたら3年

生レベル」「6個書けたら6年生レベル」としている。質より量を要求する。

④理科ではタブレットは使わせない。実験は追加も含めて、なるべく多くやる。

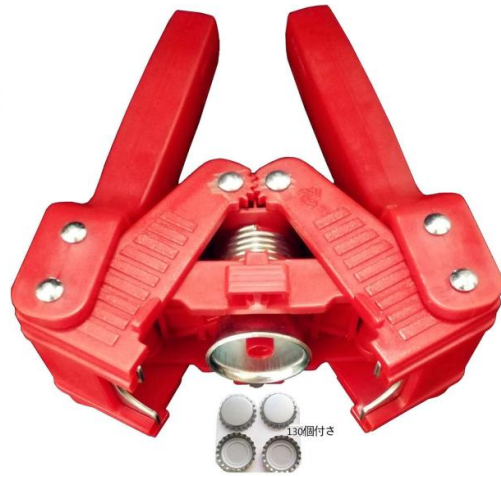
タブレットは、子どもたちにとつて、刺激が強すぎ、何事も容易に調べられることができてしまう。それゆえ、理科の教科の時だけは、タブレットを使わせないようにしている。調べ学習はしない。なるべく、体感を伴った実験をやらせるようにしている。

⑤テスト前には問題作りをさせたり、プレテストをさせたりする。

問題作りは、ノートの後ろから、ページを縦半分折り目をつけさせ、左に問題、右に答えを書かせる。テスト前に、子どもたち同士で、問題の解き合いをさせていく。プレテストは、テストから抽出することが多い。どうしても覚えておかないといけな問題問題を解かせる。採点（合格）は、テストよりも厳しめにして、やり直しさせる。

※12月21日に、学力研の常任委員で集ま

り、冬の学習会をした。現在の学力低下問題について、一人A4一枚のレポートを書き、交流。前ページが私の書いたレポート。



体感を伴った実験をするために

六年理科「てこのはたらきとしくみ」のために、「打栓機」を買った。三四五七円。授業の中で、子どもたちにビール瓶の栓を抜かせるのだが、これまではペンチを使っ

てはめていたので、時間もかかり、しっ
かり瓶に王冠をはめることができる。
栓抜きも百均で六個購入。(三個は自分の
家にあった。)

ビール瓶も瓶ビールを買って飲んで、九
本用意。

年に一回しかない実験のために、結構、
お金を使ったものだが、今後も六年理科を
担当することは多いと思い、必要経費の内
と割り切った。(自腹だが。)

てこを利用する道具として、はさみ・ペ
ンチ・栓抜き・ピンセットを使わせ、気付
いたことを書かせた。

栓抜きの気付いたことのみを紹介。

- ①せんぬきをもつ場所によって開ける力が
変わった。
- ②せんぬきで取ると簡単に取れたけど、手
でやってみてもとれなかった。せんぬきを
もつ場所がとおいほど、よりよい力であ
けることができた。
- ③力がいらぬ。はさみやピンセットとち
がってうごく部分がないあ
- ④手を使うと開けにくいけど、せんぬきを
使うと、いっしゅんで開けることができた。

⑤手でやってもとれなくて、せんぬきを使
ったら簡単にとれた

⑥手じゃとれないけどせんぬきを使ったら
かんたんにとれた。

⑦ひっかけてすぽっととれるのがきもち
い

⑧手でぬけるのをてこのげんりでやるとす
ごくぬけやすくなった。

⑨少しの力でいい

⑩力は少なくあけられる。

⑪力はいらん。

⑫かるち力であけられる。

⑬かんたんにあけれた。

⑭力が弱い人でもできる(すぐあけれる)

⑮はしの方でやると簡単に開けられた。

⑯かんたんによい力であけれる

⑰小さい力でもすぐにあけられる

36 人学級が4クラスなので、約150人が
栓抜き体験をできることになるので、今回
の支出は安いものである。

てこの学習は、体感を通して、てこの働
きと仕組みを学んでいく必要がある。めつ
たにできない栓抜き体験も、道具さえあれ
ば、しっかりと体感させられるのである。

一、歴史研究論文への挑戦

一年間歴史を学んでくると、豊臣秀吉や徳川家康のこと、明治以降の戦争の歴史など大いに興味を抱きはじめます。時間的・空間的認識への発達の兆しが日に日にふくらんでくる時期でもあります。新しい知識と概念をどんどん摂取し、時空を超えての広い世界にまなこを注ぐようになってきているのです。歴史についての有機的な知識を得させる上で、歴史上の人物の伝記を読む調べることは入口になります。人物を通して歴史を身近なものとして理解していく力が着実についてきます。どう読みどう調べ、どうまとめるかという歴史の学び方を学ぶことにもなります。

二、社会科と「総合的な学習の時間」を関連させて歴史上の人物を学ぶ

私が歴史研究論文の実践を行った時には「総合的な学習の時間」はありませんでした。

た。社会科や他の時間から捻出して取り組みを進めました。この実践は、今では「総合的な学習の時間」の位置付けとして成立するように思います。

社会の学習指導要領の（2）のアには

「児童の興味・関心を重視し、取り上げる人物や文化遺産の重点の置き方に工夫を加えるなど、精選して具体的に理解できるようにすること。その際、指導に当たっては、児童の発達の段階を考慮すること」解説には「小学校の歴史学習は、人物の働きや代表的な文化遺産を中心として学習することとしている。児童にとっては我が国の歴史を初めて学習することから、児童の興味・関心を踏まえて、取り上げる人物や文化遺産を精選する必要がある。また、小学校の歴史学習においては、歴史上の主な出来事や年号などを覚えることだけでなく、我が国の歴史に対する興味・関心をもち、歴

史を学ぶ楽しさを味わわせるとともに、歴史を学ぶことの大切さに気付くようにする必要がある」

「指導の重点の置き方に工夫を加え、人物の働きを具体的に理解できるようにする。」

その際、児童の発達の段階を踏まえた教材資料の内容や提示の仕方などを工夫し、学習活動を具体的に展開する必要がある。」

「指導の狙いを実現できるのであれば、例示した人物に代えて、他の人物を取り上げることも可能である。」とあります。

総合的な学習の時間の指導要領には、「総合的な学習の時間は、児童が自ら学び、自ら考える時間であり、児童の主体的な学習態度を育成する時間である。また、自己の生き方を考えることができるようにすることを目指した時間である。その意味からも、総合的な学習の時間において、児童の興味・関心に基づく探究課題を取り上げ、その解決を通して具体的な資質・能力を育成していくことは重要なことである。」として、「児童の興味・関心に基づく課題」という探究課題があります。他教科との関連においては、「他教科等及び総合的な学

習の時間で身に付けた資質・能力を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること。」と書かれています。

三、歴史上の人物を学ぶ意義

教育学者の森信三氏は、

「優れた先賢から学ぶということは、結局それらの人びとの精神をたとえ極致の一端なりともわが身に体して、日々の実践に生かすことです。人間の一生に少なくとも「伝記」を読むべき時期が三度あります。

そのうちの第一の時期は、すなわち小学校の五・六年から中学高校へかけての立志の時期です。次の第二期は三十代の十年間です。人間形成の基礎づくりの時代です。そして、第三期とは、六十歳から八十歳辺にかけての前後二十年間です。自分の最も尊敬している偉人の伝記は、精しく調べていて、自在に実例が出るようであれば真の力とはなりにくい」と述べています。歴史上の人物を知ることとは、**自己の生き方を考えること**にもなると考えます。

四、歴史研究論文のすすめ方

六年生は、六年間で身につけたことを総

動員して、知的に高い課題に向き合ってほしいと願っています。子どもたちは三学期になると教科書の内容はほぼ終わり、復習が多くなります。その時に卒業を前にして、もっと知的欲求を満たしてくれる課題を求めている面があります。教師が適切な課題目標を与えないと日々の生活がくずれてくることもあります。自分の持っている力を一段高くしてくれる課題を取り組む中で、他の力もぐんぐん伸びていきます。

私が歴史研究論文を実践してみようと思つたきっかけは、岸本裕史の「どの子も伸びる（1）」の「こどもが納得する評定を」の子どもの論文「北条政子の一生 三村祐子」です。すごい量と内容です。「第一次世界大戦 石原豊」も頑張つて取り組んだことが伝わってきました。

模倣（追試）をしたいと思ったのですが、「どの子も伸びる」には指導方法がほとんど書かれていませんでした。その後に出版された「すべてのこどもに確かな学力を小5年篇 小6年篇」にヒントがありました。それを手がかりに、作文指導やレポート指導などの本を読み込み、クラスの実

態に合わせ、自分なりの工夫を加えて実践をしていきました。歴史研究論文は、六年生にとつてすてきな知的課題です。子どもたちにこう提案しました。

「小学校六年間、いろんな学習をしてきました。その総まとめとして、歴史をテーマとして、論文を書いてもらいます。」と言つて、次のプリントを配りました。

歴史研究論文について

六年間で身につけてきた力の総力をあげてとり組む

枚数…原稿用紙四〇〇字詰め 三十枚以上
内容…歴史上の人物を調べる
期間…一月～三月

書き方・資料のさがし方…図書館などへ行つて、まず子ども向けの本をさがす。
（歴史漫画も含む）本は、最低五冊は読む
（子ども向けの本だけでなく、大人向けの岩波新書・中公新書・文庫などを1冊は必ず目を通す）

論文ノート…大学ノートを用意し、ノートで調べたことをメモする。知らない言葉分らない字は辞書で調べておく。

（次号へ続く）

「先生のための学校」 誌上 開校

学力研 先生のための学校 校長 久保 齋 2026 1

漢字学習を「苦行」から「歓喜」へ

先人に学ぶ

「つぶやき漢字ドリル」誕生

多くの先生が「漢字ドリル」を使っています。しかし、努力のわりには成果があまりません。その原因ははっきりしています。それはドリルに書かれている「書き順」のところに問題があるのです。ドリルの書き順は色を変えたり、番号を振ったりして書き順を間違わないようにしっかりと書かれています。これでは子どもたちは一、二、三、四・・・と書いてしまひ漢字学習の基本である「分解して総合する」「分析して順序正しく統合する」という脳の働きにはなっていないのです。

ドリルなどなかった昔の人は子どもに「熊」という字を教えるとき「ム、ツキ、

ヒ、ヒ、ドンドンドンドン」と教え、指書きさせていたのです。「読」という字を教えるとき「ナベブタ、ニ、クチ、ジュウイチ、ワ、ル」とつぶやかせて教えていました。これは漢字を分解する時に意味ある言葉、覚えやすいリズムに分解するという昔の人の子どもへのやさしさ、先人の知恵なのです。

もし、この方法ですべての漢字の覚え方を創ることができたら、子どもたちが喜んでくれるに違いない。これが「つぶやき漢字ドリル」の誕生の瞬間でした。

当時、三年生の担任をしていたので、早速、次のように創りはじめました。こうして、その日から新出漢字を一日二字学習するときに、つぶやき方を教えて、みんなで唱え、みんなでつぶやいて、机に指書きさせて、全員がつぶやけるよう

にしてから指書きを宿題にしたのです。やり方は次のようです。

略

とてもおすすめの方法として、ドリルの子どもたちの練習用の升目のところに漢字の覚え方、つぶやき方を書いて帰らせるのです。こうして、市販のドリルに「漢字のつぶやき方」をいれると完璧な漢字の教科書になります。

つぶやき漢字ドリル」の光明

漢字学習に共同の輪

つぶやき漢字を活用して漢字学習を宿題にし、漢字の小テストを行ってとてもよかったこと、それは字が美しくなったことです。そして、子どもたちの解答に変な間違いがなくなったということです。つぶやき漢字活用前は、トメ、ハネ、ハライがいいかげんな解答や、よく似ているけれどどこか違う字が多く、テストに赤ペンを入れて返してやるが必要でしたが、それがほとんどなくなりました。そして当然のことですが・小テストの成績が百点がほとんどで八十点、九十点が

数人ということになり、以前のように六十点、四十点が散見するようなことがなくなり成績がよくなりました。

しかし、私が、つぶやき漢字の活用での一番の光明だと感じたことは、子どもたちのテスト前の様子です。以前はドリルを開けて復習する子は少しいましたが、ほかの子はただなにもせず、ぼうっとテストを待っていました。ところがこのつぶやき漢字を宿題にしてからは、お隣さんに漢字を質問してもらい、それをたいして「方書いて、ノ書いて、子書いて、シンニョウを書く」などと指書きするようになったのです。今までは、お隣さんと漢字練習しなさいと言っても、もう一つ乗らない様子でしたが、つぶやき漢字を教えてやったら、ワイワイ、キラキラ楽しく漢字のテスト勉強をするようになりました。つぶやき漢字という覚え方の「教育技術」が漢字学習の「共同」を生むようになったのです。

そればかりでなく、私が新出漢字のつぶやき方を教えていると、子どもたちが書き順に則った自分なりのつぶやき方を

披露して、あーや、こーやとクラスがつぶやき方でもりあがるのです。これは私のクラスだけでなく、つぶやき漢字の追実践をしてくださった学力研の先生方からもたくさん聞かされた現象です。新出漢字だけでなく、漢字の学習に対する「自発性、自主性・自分なりの工夫」が子どもたちの中から自然に生まれはじめているのです。

昔の人の字は実に美しいです。それは部首、部分を大切に正しい順序で唱えたり、つぶやいたりして漢字を覚え、正しい書き順でつぶやきながら漢字を書いていたからです。

今の若者、否、令和の大人たちは本当に字が汚い、「トメ、ハネ、ハライ」など無茶苦茶です。日本の「漢字かな交じり文」という文化が壊れ、壊されていつているのです。そしてタブレット学習によつてこの文化は壊滅的打撃を受けつつあります。その責任の一端は小学校教育に、初等普通教育の教諭、私たちにあります。民族の文化の根源は、文字であり言葉なのです。文字を守り、正しい文

字文化を後世に正しく継承することこそ国語科の果たすべき社会的任務のです。

つぶやき漢字指導の効果は次の四つです。

① 美しい字、正しい字が書けるようになり、漢字の習得数が格段に上がる

② 漢字学習の共同が生まれ、漢字学習が苦役から歓喜に変わる

③ 漢字の記憶に自分なりの工夫が生まれ、自発性、自主性が自然におこる

④ 日本の文字を守り、文字文化を正しく後世につたえることができる
「学力低下」を嘆く声は大きい。

しかし、原因を探っても問題は解決しないのです。私たち初等普通教育の教諭は学力低下の当事者なのです。責任者なのです。打開の方法、打開の知恵を愛する子どもたちのために切り開かなければなりません。今そんな思いで「教科書の読解記憶・論理の記憶で子どもは伸びる」を執筆しています。原稿はその一部の抜粋です。

リレー連載 「来年度の全国大会講演者新井紀子さんについて」③
シン読解力 第5章「2Bの鉛筆が教えてくれたこと」より

学力研常任委員長 岸本 ひとみ

★「書く」ことの意義を再確認しました

長くこの仕事をしていると、子どもと教育の変容に驚くことがしばしばあります。最近では1年生担任が続いているため、就学してくる子どもの実態の変容がリアルにわかります。

鉛筆の持ち方はいわずもがな、最近では、指の使い方や力の入れ方も未発達の子どものがたくさんいます。さかのぼり指導として、グーパー練習や、指を使った数かぞえ、雲梯にぶら下がる、などなど、いろいろと試しています。でも、小学生ともなると、短期間の集中練習で、ある程度回復してきます。1学期は、あらゆる教科の最初にこんな指の基礎運動を取り入れるのが、この数年の当たり前になってきました。

これを怠ると、1学期の「ゆっくりていねいに」書くひらがな指導から、カタカナと漢字が一気に出てくる2学期の学習で、

ノートに書くスピードがつかないのです。

そして、3学期には、けっこう視写を取り入れています。先日、「のはらうた」の「おれはかまきり」を、板書しながら、ゆっくり視写したところ、だいたい15分で書き上げることができました。

読解力を身につけるには、学習言語を使いこなすことが必要ということとは、「シン読解力」に繰り返し出てきます。学校現場で、しかも1年生の指導でできることは、右記のようなことではないかと考えています。

字を書くのが速い子も遅い子もいます。字を書かせると、遅い子をほかの子が待たなければなりません。それが時間の「無駄」だというばかりに、視写はプリントの穴埋めに、さらには、正解選択肢を選ぶことに代替されてしまったのです。

その結果、何が起きたでしょう。本来は、問題なく視写できるはずの能力のある子も一斉に筆圧が下がり、2Bでないと書けないようになったのです。穴埋めだけが目標になると、文の構造を理解したり、言い回しを覚えたりする機会が奪われます。第2章で紹介した「幕府問題」の驚くべき低正解率は、そのような「キーワードだけを覚えればよい教育」と無関係ではないと私は考えています。(シン読解力第5章)

タブレットの画面を見ながら、文字や数字をタップしていく子どもたちを見ていて、これでいいのかと、疑問を抱えながら実践を重ねている私たちにとっては、新井さんのお話を聞く機会が持てることは、たいへん嬉しいことです。ぜひ、8月1日(土)は大阪において下さい。

そして、新井さんのお話から勇気と元気を受け取って、日本中の学校で、あらためて学力研の地道な実践が広がっていくことを願っています。

局長だより

1月

◇学力研最新情報 岸本 ひとみ



未会員1回1000円

第1回 3月25日 19時半

第2回 3月26日 "

1年生の担任準備は、年度末から始まります。事務作業だけでなく、1年生の学力づくりのポイントを教えます。

★春の愛知・春日井フォーラム

3月29日(日)

参加費2000円

(会員1500円)

年末には、年明け1月～4月までの学習会の企画を調整したり、最後の確認をしたりするのが、仕事になります。さて、2026年の春の予定は左記のようになります。

★春 先生のための学校

(会員限定)

第1回 3月22日(日)

第2回 4月12日(日)

第3回 5月17日(日)

毎年、たくさんの方が受講されます。特に、初めて担任をするという先生には、わかりやすいと好評です。

★1年生講座

(会員無料)

★新学期スタート講座

参加費2000円

(会員1500円)

4月4日(土)午後 エル大坂

これも、毎年開いている新学期の学力づくり&授業づくりの講座です。対面の学習会なので、「お土産があるのが嬉しいです。」と、参加者の方の感想があります。

●第19期先生のための学校

「先生のための学校」も残すところ2回となりました。

テーマ1 現場は厳しい、しかし、

教師の創意工夫とその哲学によって子どもたちの学力をもっともっと高め、自治意識に満ちたクラスをつくれるはずだ!!
「学力づくりで学級づくり、授業でクラスづくり」を力説する学力研の哲学を学んでいただく!!

テーマ2 「困った子ども、困った親、困った同僚、困った学年主任、困った管理職」

困ったことなんでも相談会の創設!! 全体相談、個別相談、先生のための学校スタッフ、講師が相談に乗ります。

1月17日(土) 理科

「低学年理科的課題から高学年理科までを展望して」

講演1 講師 荒井 賢一

知っていることの発表から授業を始め、板書に全員で書かせ、交流させ、深めさせる。教科書

は毎回使い、必ず音読からスタートする。実験では一部の子だけが活動するのではなく、全員が活動するシステムを考案している。ユニークでだれでも伸ばす理科授業のあり方を語る。

講演2 講師 久保 齋

実験では大活躍でも、テストではさっぱり、そんな子どもを育てたらあかんと考え「実験が先か、学習が先か」実際にやってみて、「理科」学習の二つのパターンを科学しよう。と呼びかけて研究、理科は子どもたちの素朴概念を打ち砕くこと、知識があればあるほどより深い疑問がわく。これが理科の神髄と語る。

2月14日(土)

社会科「低

学年社会科課題から3, 4, 5, 6年それぞれの社会科へ」

◆会員になれば

会員になっていたければ、どの講座も会員割引で参加いただけます。また、夏には、「シン読解力」の著者新井紀子さんをお招きしての全国フォーラムもあります。ぜひ、ごいっしょに学びましょう。

学力研カレンダー

《各地のサークル・部会

2026年 1月

例会、イベント》



どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

1/

24 (土) 大阪教育サークルはやし 午後 エルおおさか 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp

24 (土) みなみ学力研 9時45分～12時 阿倍野区民センター 図書 nobu580701@yahoo.co.jp

日時を確認ください

春日井学力研 17時半～ レディヤン春日井(JR勝川駅) 山口 080-6904-1697

いろえんぴつ (加印) 18時半～ なんなん広場会議室 岸本 090-9117-6330

伊丹学力研 18時半～ 伊丹市役所横サイゼリア 前田 090-9715-3830

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等のご連絡下さい。

○ 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

○ 学力研・先生のための学校【全5回】

9月13日(土) 13時半～16時45分【済】 10月11日(土) 13時半～16時45分【済】

11月 8日(土) 13時半～16時45分【済】

2025年

1月17日(土) 13時半～16時45分 2月14日(土) 13時半～16時45分

○ 1年生講座 第10回 2026年1月24日(土) オンライン
(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

○ 家庭塾『春のほっこり家庭教育カフェ』2026年2月15日(日) 13:30～

於:京都下京いきいき市民活動センター 2F 会議室

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

ご意見・ご感想は下記まで

荒井 賢一

E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp

李 詩愛

E-mail iwamotoshie@gmail.com

堀井 克也

E-mail katsuya4k1h9@gmail.com

加藤 英介

E-mail hgrtd533@yahoo.co.jp